

「つもりだ」に関する一考察

金玉任 教授指導

이 論文을 碩士學位論文으로 提出함

2005年 11月

誠信女子大學校 大學院

日語日文學科

李아람

논문개요

현대 일본어의 「つもりだ」에 관한 연구는 주로, 의지동사에 접속되는지 무의지동사에 접속되는지에 관한 고찰과 의지의 지속성이나 확고성 등에 의한 고찰이 그 주류를 이루었다. 또한, 《意志》의 용법에 관한 연구가 많으며, 다른 용법과의 관계에 대한 논의에 있어서도 통일성이 보이지 않는다. 따라서 본 논문에서는 2인칭과의 공기관계, 유사표현과의 교체현상, 그리고 화자의 의도성 강약이라는 관점에서 「つもりだ」를 「予定」「意志」「評価」「照応」「假定」의 다섯 가지로 하위분류하여 考察하였다. 그 결과를 정리하면 다음과 같이 된다.

지금까지의 연구에서는 형태적인 구별이 없기 때문에, 「予定」과 「意志」를 《意志》로 다루어졌다. 그러나 「予定」의 경우에는, 의도정보다는 결정사항(스케줄)에 관한 표현이기 때문에, 「(よ)うと思う」와 치환할 수 없으며, 주체가 2인칭인 의문문에도 사용할 수 있다는 것을 알 수 있었다.

그 반면에, 「意志」의 경우에는, 의도성을 나타내는 용법이기 때문에 「予定だ」와 치환할 수 없으며, 주체가 2인칭인 의문문에 사용하면 실례되는 표현으로 된다는 것을 알 수 있었다. 이와 같이, 「予定」과 「意志」는 서로 다른 특징을 갖기 때문에, 각각 다른 용법이라고 생각된다.

또한, 「評価」와 「照応」, 그리고 「假定」은 주체의 주관적인 의도를 나타낸다고 하는 의미적인 공통점 때문에, 주로 같은 용법으로 취급되어져 왔다. 그러나 다음을 보면 알 수 있듯이, 서로 다른 특징을 가지고 있는 것을 알 수 있었다. 우선 「評価」의 경우에는,

주체의 주관으로 현재를 평가하는 것을 나타내는 표현이기 때문에, 「ル形」에 접속하는데 반하여, 「照応」의 경우에는, 사태의 성립 전에 주체가 가지고 있던 본래의 의도를 나타내는 표현이기 때문에, 「はずだ」와 교체할 수 있다고 여겨진다. 그리고 「假定」의 경우에는, 주체가 가정하여 생각한다는 의미에서, 「と思う」와 겹치는 부분이 있기 때문에 치환할 수 있다고 생각된다. 이처럼 「評価」과 「照応」, 그리고 「假定」은 서로 다른 특징을 가지고 있기 때문에, 각각 다른 용법으로 처리해야 한다.

따라서, 「つもりだ」를 「予定」「意志」「評価」「照応」「假定」의 다섯 가지로 하위분류하여, 전체상을 그려내고자 하였다. 그러나 보다 정확한 결론을 이끌어내기 위해서는, 소설만이 아닌 다양한 자료에서 예문을 발췌하여 분석할 필요가 있다고 여겨진다. 또한, 「つもりだ」는 왜 「予定だ」「(よ)うと思う」「はずだ」와 같이, 다양한 교체영역을 이루고 있는가에 대한 결론을 이끌어내기에 아직 부족함이 있었다고 생각된다. 그리고 많은 연구에서 「つもりだ」와 치환할 수 있다고 지적하였는데도 불구하고, 아직 체계적인 분석이 이루어지지 않은 「氣だ」와의 비교를 포함하여 남겨진 문제점은 앞으로의 과제로 삼겠다.

目 次

論文概要

I. 序論

- 1. はじめに 2
- 2. 本論文の構成 4

II. 先行研究と問題提示

- 1. 先行研究と問題の提示 8
 - 1.1. 名柄・広田・中西(1987) 8
 - 1.2 益岡・田窪(1989) 8
 - 1.3 山田(1993) 9
 - 1.4 ニョー(1998) 11
 - 1.5 安達(1999) 12
 - 1.6 吉川(2000) 15
 - 1.7 三枝・中西(2003) 18
- 2. 本研究の立場 20

III. 本論

- 1. 「つもりだ」の用法 24
 - 1.1. 「予定」 24
 - 1.2. 「意志」 30
 - 1.3. 「評価」 38

1.4.	「照応」	47
1.5.	「仮定」	52
2.	「つもりだ」と置き換えの可能なもの	60
2.1.	「つもりだ」と「予定だ」	60
2.2.	「つもりだ」と「(よ)うと思う」	64
2.3.	「つもりだ」と「はずだ」	68
IV.	結論	72

参考文献

ABSTRACT

I . 序 論

1. はじめに

日本語における意志を表す表現の中で、発話でも文でもよく使われる形式の一つに「つもりだ」がある。「つもりだ」は、意図を表す形式名詞「つもり」が「だ」を伴ったものである。日本語教育では、「つもりだ」は「(よ)うと思う」とほぼ同じ内容を指し、また「気だ」や「予定だ」との置き換えも可能な場合があるとされている。しかし、「つもりだ」は、これらの表現とすべて置き換え可能なのだろうか。

先行研究によると、「つもりだ」の用法には、(表1)のような《意志》《錯誤》《仮想》の用法があるとされている。まず、森山(1990)では、「つもりだ」は、発話時における話し手の決定を表すのではなく、以下の(ア)の例のように、話し手が発話時以前から決めていた計画としての意志を表すとしている。

(ア) 私は明日、3時に研究室に行くつもりだ。《意志》

一方、ニョー(1998)や吉川(2000)は《意志》以外の用法についても説明している。ニョーの場合、《意志表現》と《自己認識》という二つの用法に触れ、前者は、未来テンスである「ル形」の意志動詞が、「つもり」に接続している場合であり、後者は「タ形」に接続するか、一回性の具体的な出来事ではない動詞に接続するとしている。そして、吉川の場合、《意志》は「ル形」の意志動詞に接続するのに対して、《錯誤》と《仮想》は「ル形」の無意志動詞か「タ形」に接続することを指摘している。これらの研究を踏まえると、「つもりだ」には、それぞれ《意志表現》《自己認識》と《意志》《錯誤》《仮想》の用法があると指摘していることになる。

(表1) 先行研究における「つもりだ」の用法

例	用法	
	ニヨー	吉川
・行く <u>つもりだ</u>	《意志表現》	《意志》
・君のことは充分知っている <u>つもり</u> です ・とらの絵をかいた <u>つもり</u> です	《自己認識》	《錯誤》
・本を買った <u>つもり</u> で貯金する		《仮想》

しかし、従来では、次章で述べるように、主に「つもりだ」に接続する動詞の形態に関する研究であったため、用法の間の関連性における体系的な説明になっていないと考えられる。

そこで、本論文では、先行研究をふまえ、「つもりだ」について、今まで部分的にしか説明されていない二人称との共起関係、類似表現との交替現象、事柄の実現の程度、そして行為遂行に対する話し手の意図性の有無という観点からの分析を試みる。そして、他の表現との置き換えの可否なども検証しながら、「つもりだ」の全体像を明らかにしたいと思う。

2. 本論文の構成

本論文は全四章で構成されている。まず、第一章と第二章では、先行研究において、「つもりだ」がどういう基準を用いてどのように下位分類されてきたかを検討する。次に、第三章では「形態的な基準」と「意味的な基準」を用いて「つもりだ」を五つの用法に下位分類して分析を行い、交替可能である代表的な表現である「予定だ」「(よ)うと思う」「はずだ」との比較を行う。最後の第四章は本論文の結論である。

本論文では、主に状況が設定された実例の文を、次のような作品から抽出した用例を例文に使用した。例文の引用は略語表記にする。

(各々、作品名の五十音順)

作 品 名	出 版 社	著 者	略 語
『あすなろ物語』	新潮文庫	井上靖	[あ]
『一瞬の夏』	新潮文庫	沢木耕太郎	[一]
『エディプスの恋人』	新潮文庫	筒井康隆	[エ]
『O・ヘンリ短編集』	新潮文庫	オー・ヘンリ	[O]
『女社長に乾杯!』	新潮文庫	赤川次郎	[乾]
『過去から来た女』	角川文庫	赤川次郎	[過]
『風に吹かれて』	新潮文庫	五木寛之	[風]
『勝手にしゃべる女』	新潮文庫	赤川次郎	[勝]
『悲しみよこんにちは』	新潮文庫	サガン	[悲]
『偽原始人』	新潮文庫	井上ひさし	[偽]
『きみに読む物語』	アーティストハウス	雨沢泰 訳	[き]
『金閣寺』	新潮文庫	三島由紀夫	[金]

『錦織』	新潮文庫	宮本輝	[錦]
『偽原始人』	新潮文庫	井上ひさし	[偽]
『黒猫』	新潮文庫	ポー	[黒]
『こころ』	角川文庫	夏目漱石	[こ]
『古代への情熱』	新潮文庫	シュリーマン	[古]
『佐々木の場合』	新潮文庫	志賀直哉	[佐]
『山月記』	新潮文庫	中島敦	[山]
『新源氏物語』	新潮文庫	田辺聖子	[源]
『新橋烏森口青春篇』	新潮文庫	椎名誠	[新]
『ジーキル博士とハイド氏』	新潮文庫	ステイーヴンソン	[ジ]
『十五少年漂流記』	新潮文庫	ジュール・ヴェルヌ	[十]
『人民は弱し官吏は強し』	新潮文庫	星新一	[人]
『砂の上の植物群』	新潮文庫	吉行淳之介	[砂]
『砂の女』	新潮文庫	安部公房	[女]
『ズベ刑事』	新潮文庫	胡桃沢耕史	[ズ]
『世界の終りとハードボイル』	新潮文庫	村上春樹	[世]
『太郎物語』	新潮文庫	曾野綾子	[太]
『チップス先生さようなら』	新潮文庫	ヒルトン	[チ]
『長距離走者の孤独』	新潮文庫	シリトー	[長]
『沈黙』	新潮文庫	遠藤周作	[沈]
『ティファニーで朝食を』	新潮文庫	カポーティ	[テ]
『点と線』	新潮文庫	松本清張	[点]
『二十歳の原点』	新潮文庫	高野聖子	[二]

『二十四の瞳』	新潮文庫	壺井栄	[瞳]
『人形の家』	新潮文庫	イプセン	[家]
『人間失格』	新潮文庫	太宰治	[失]
『野火』	新潮文庫	大岡昇平	[野]
『裸の王様』	新潮文庫	開高建	[王]
『はつ恋』	新潮文庫	ツルゲーネフ	[は]
『華岡青州の妻』	新潮文庫	有吉佐和子	[華]
『冬の旅』	新潮文庫	立原正秋	[冬]
『ブンとファン』	新潮文庫	井上ひさし	[ブ]
『ボッコちゃん』	新潮文庫	星新一	[ボ]
『山本十五六』	新潮文庫	阿河弘之	[本]
『榆家の人びと』	新潮文庫	北杜夫	[榆]
『レッスン』	新潮文庫	五木寛之	[レ]
『若き数学者のアメリカ』	新潮文庫	藤原正彦	[若]

Ⅱ． 先行研究と問題提示

B2 勉強をします。

(キ)のような文は、コミュニケーションフローと話題の視点で検討すると、「夏休みの予定」から「今晚の予定」へと話題に飛躍がるため、その受容性が低くなるという。

また、「つもりですか」と「しますか」を中心に比較して、予定を伝えるいくつかの統語形式を列挙(クB)し、その差異が「事柄の実現の可能性の程度の差」にあるとしている。

(ク) (A、B二人の会話)

A 夏休みに国へ帰りますか。

B 帰ります。

帰るつもりです。

帰ろうと思っています。

帰りたと思っています。

《予定》

山田は、上のよういくつかの統語形式を列挙し、「帰るつもりです」は、「帰ります」に比べて不確かさを伴う発話者の予定を伝えるのに用いられると述べ、《予定》の用法があることを指摘している。一方、以下の(ケ)のような場合は「意志の有無」がその質問の焦点になっているとしている。

(ケ) (A、B二人の会話)

A1 荷物を片付けてどうするんですか。

B1 ……

A2 ここから出て行くつもりですか。

B2 ええ、そのつもりです。

《意志》

しかし、今までの「つもりだ」の研究において《意志》に当てはまる用法が、どのような場合《予定》と捉えられ、どのような場合《意志》と捉えられるのか、その区別が明らかでないと思われる。

1.4 ニョー(1998)

ニョー(1998)は「つもりだ」には、《意志表現》を表す用法(コ)以外に、(サ)のような《自己認識》と言われる用法があり、《自己認識》の中では(シ)のような「仮定した気分」を表すものもあるとしている。

(コ) 真剣にやるつもりだ。

《意志表現》

(サ) 真剣にやったつもりだ/やっているつもりだ。

《自己認識》

(シ) 川面を見ると、鰐が丸太ン棒のように、すーっとこっちへ流れてくる。

「バカな鰐公め。丸太ン棒に化けたつもりているぞ」

《自己認識-仮定した気分》

ニョーは、《意志表現》を表す「つもりだ」の条件として、意志性の述語動詞が使われ、その動詞が「する」形で未来テンスであるか、「している」形で未来に関わりのある継続相であること、そして、常に一回性で具体的な出来事であることを指摘し、以下のような(ス)の例をあげている。

(ス) 居心地が良いから後半年は入院しているつもりだと述べた。

《意志表現》

また、(セ)や(ソ)のように、《意志表現》の「つもりだ」は「つもりだった」の形で、過去の意志を表すものであって、予定変更、あるいは意志・意図の不実現と結びつくとして述べている。さらに、この場合の「つもりだ」は、二人称に用いると失礼な言い方になるが、(タ)のような今後の予定を尋ねる文脈や(チ)のように丁寧の接頭辞「お」がつく場合は例外としている。

- (セ) 今日は仕事場へ出ないつもりだったが、車を見てると行きたくなくて、
大急ぎで片付けをして、車に乗り込む。 《意志》
- (ソ) 梶井は初めエンジニアになるつもりであったが、徐々に文学を志すようになった。 《意志》
- (タ) 老人だけが、もう一度、こちらに引き返してきた。
「ときに、あんた、これからどうなさるつもりですか？」
「どうって、だから、虫さがしですよ。」 《予定-例外》
- (チ) 今晚出かけるおつもりですか。 《丁寧-例外》

このことから、予定変更、あるいは意志・意図の不実現の区別が明確にはされていないものの、《意志表現》の用法が「予定」と「意志」とのふたつの用法に下位分類できることを示唆しているといえよう。ただ、(タ)の場合は、(チ)と同じく「なさる」のような丁寧な表現を使っているので、その区別における基準を明確にする必要があると思われる。

1.5 安達(1999)

安達(1999)は、意志のモダリティを表す中心的な形式(「する」「しよう」と)周辺の形式(「つもりだ」「気だ」)における、意味・特徴について述べ、その中でも特に、形式名詞に由来する「つもりだ」と「気だ」との対比を行って

いる。

「つもりだ」は、意図を表す形式名詞「つもり」からできたものであり、話し手の未実現の意志的動作をとる場合に意志の表現になるとしている。次のような例がそれである。

(ツ) 「添田さん、今日はゆっくりあそばせよ」

孝子は、柔和な顔におだやかな笑顔で勧めた。

「ええ、夕方までお邪魔させていただくつもりです」 《意志》

ただし、(テ)のように、既に実現している事態や(ト)のような意志的でない事態をとる場合には、意志に関わる表現とは言えないと述べている。

(テ) さとみ「あの頃に比べたら、すこしは強くなったつもりでいたのに」

《意志ではない》

(ト) 結局、いくらしっかりしているつもりでも、知らず知らず取材対象の考

え方に洗脳されてしまうのである。 《意志ではない》

また、「つもりだ」は話し手の意志に限定されず、第三者の意志を表すことができるため、(ナ)のように、小説の地の文などで登場人物の意志を表現するのにも使われるとしており、(ニ)のように、疑問文にすることによって、聞き手の心づもりを尋ねることもできるとしている。

(ナ) 久美子はもう一晩京都に泊まるつもりだったが、昨夜泊まったあたりに

宿をとる気持はなかった。 《意志》

(ニ) さとみ「いいの、それでも——私は永尾君が好き、付き合いたいと

かじゃなく」

時子「じゃあ、ずっと一人でいるつもり?」

さとみ「そうなるかな」

《意志》

一方、「気だ」は、(ヌ)のような第三者の意志を表す文や(ネ)のような疑問文としては使えるが、話し手の意志を表す文には使えないとしている(但し、(ノ)のような否定文は例外)。

(ヌ) 卷子「早くしないと——あの子、絶体言う{気/つもり}よ」

納子「昔から一人だけ、違うことするんだから」

《意志》

(ネ) 忠司「お父さん——」

昭男「あ?」

忠司「これからどうする{気だ/つもりだ}」

《意志》

(ノ) 私は彼と仲よくする{気はない/つもりはない}。

《意志》

上に見てきた例では、ふたつの形式は類似した使い方をされているように思われるが、実際には「つもりだ」に比べて「気だ」の使用は非常に強く制限されていると述べている。例えば、第三者の意志を表す状況であっても、次のような例では「気だ」は使いにくい。

(ハ) が、たとえそれがニュースとして多少の価値があっても、添田は誰にも話さない {つもり/??気} だった。

《意志》

このような制限は、意図を表す「つもりだ」が思想的であるのに対し、「気だ」はより情意的であり、推論によってしか知り得ない情報を表すという性質を持

つところに由来するとしている。

さらに安達は、「つもりだ」と「気だ」が共に使われる疑問文において、(七)のような例をあげ、「つもり」を用いた(七a)では、一人であることを続けるかどうかということを単純に尋ねる疑問文として解釈されるが、「気だ」を用いた(七b)では、一人でいるのはよくないことだというニュアンスが感じられると述べている。

(七) a. 君はずっと一人でいるつもりですか？

b. 君はずっと一人でいる気ですか？

《意志》

しかし、先に挙げたニュー(1998)の研究では「つもりだ」が疑問文に用いられると失礼な表現になるとされてきたが、ここでは「つもりだ」の疑問文は単純に尋ねる表現であり、「気だ」のほうが失礼な表現であるとしている。このような違いはなぜ生じるのであろうか。もし、「つもりだ」の疑問文が失礼な表現になる場合もあり、また単純に尋ねる表現になる場合もあるとすると、その原因は何であらうか、その検討が必要とされる。

1.6 吉川(2000)

吉川(2000)は、「つもり」に関わる意味である《意志》《錯誤》《仮想》の相互の関係、「つもり」を含む種々の形式とそれらとの関係、また「つもり」という語自体の特徴などについて考察している。一般的に、(7)のように「現在形+つもり」の場合は《意志》の意味になるとされてきたが、(へ)のように無意志動詞に「つもり」がつく場合は《錯誤》の意味になると説いている。

(7) 行くつもりだ。

《意志》

(へ) 二、三日で片付くつもりでやってきた。

《錯誤》

また、「過去形+つもり」は、(ホ)や(マ)のように《錯誤》か《仮想》を表すとし、典型的な《仮想》の例として(マ)をあげているが、「過去形+つもりで」となると《仮想》の意味合いが一層はっきりするとしている。それは、次の例(マ)と(ミ)を比べてみると明らかになるだろう。

(ホ) とらの絵をかいたつもりです。 《錯誤》

(マ) 「見たけど見なかったつもり」と言いながら、笑った。

《仮想-典型的》

(ミ) 本を買ったつもりで貯金する。

《仮想》

しかし、(マ)が典型的な《仮想》であるとするその根拠は何であろうか。むしろ、(マ)の「見たけど見なかったつもり」は、「見たけど見なかったつもりでいた」ないし「見たけど見なかったつもりで振る舞った」を省略したにすぎないのではないかと思う。特に、「過去形+つもりで」の場合は、《仮想》の意味であると判断できるが、「現在形+つもりで」の場合は《意志》の意味になる可能性もあるとしている。

「つもりで」の形の場合、上でも述べたように《仮想》の意味になるのが普通であるが、次の例をみると分かるように《仮想》の意味であるか《意志》の意味であるかが明確ではない場合もある。

(ム) 死んだつもりでがんばります。

《仮想》

(メ) 死ぬつもりで私は生れ故郷に帰ったが、死ねずして函館行きの鈍行に乗る。

《意志》《仮想》

このような現象が生じる理由として、(ム)の場合は、「つもり」の前の動詞が過去形になっているから、《仮想》の意味と捉えやすいが、(メ)の場合は、「つもり」の前の動詞が現在形になっているため、《意志》の意味になる可能性も出てくると述べている。

もう一つ、吉川は、「ているつもり」は《錯誤》を表すことが多いとし、その理由は「ている」が《意志》の表現にならないからだと主張している。

(モ) いや、何しろ男手育ちで、子供の頃から工場通いで…………お役にもたちますまいが、まあ貧乏と我慢強いことだけには練れて居るつもりですから……………
《錯誤-自身の表明》

特に、この「ているつもり」の形には、(モ)のような「自身の表明」とでも言うべき例があると指摘しているながら、《錯誤》と「自身の表明」の関係や「自身の表明」については説明していない。このことから、「つもり」の意味分類や語自体の特性を明らかにするためには、より詳しい説明が必要ではないかと思われる。

(ヤ) 大もうけするつもりでいるんだ。 《意志》《錯誤》《仮想》

吉川は、(ヤ)のような場合は、動詞を意志動詞ととるか無意志動詞ととるかによって、文脈によって、その意味が《意志》にも《錯誤》《仮想》にもなり得ることを指摘しているが、その区別を明らかにしていない。

以上の説明から分かるように、吉川は、「つもり」の前にどのような動詞がつ

くかによって、その意味を分類しようとした。しかし、《錯誤》と《仮想》の用法や《意志》と《仮想》の用法が混同しやすく、さらに、(レ)のような場合は《意志》《錯誤》《仮想》のすべての用法になり得る場合もある。このことから、「つもり」の前につく動詞の形だけではこれらの用法を分類することは難しい。そのため、別な観点からの説明の必要性が指摘できよう。

1.7 三枝・中西(2003)

三枝・中西(2003)では、「つもりだ」は、「意志動詞のマス形+つもりだ」の形で現れるとし、同じく意志を表す用法である「う・よと思う」と比べ、「う・よと思う」は(ユ)のようにその場で思いついた意志を表す意味であるのに対して、「つもりだ」は(ヨ)のように意志の持続を表す意味であることにその特徴があるとしている。

(ユ) ねえ、いい天気になってきたから、ちょっと散歩にでも{行こうと思う/*
行くつもりな}んだけど、一緒に行かない? 《意志-偶発》

(ヨ) 今までは、合格するまで何度でも頑張るつもりだった。
《意志-持続》

また、「つもり」は、話し手の意志が現実や予想、他の人の気持と違うことも表せるとして、次の例をあげている。

(ラ) 窓を閉めたつもりだったが、帰宅してみると窓が開いたままだった。
《意志-ズレ》

(リ) A: これは何の絵?クマ?
B: ネコのつもりなんだけど。 《意志-ズレ》

さらに、三枝・中西は、主語が一人称以外のときは「う・よと思う」が使えないのに対し、「つもりだ」は使えるとしている。しかし、なぜこのような違いが生じるのか、どのようなときに「う・よと思う」と置き換えられるのかについては説明されていないため、その検討が必要とされる。

(ル) 部長は次の仕事を山田さんに{任せるつもりです/*任せようと思いま
す}。《意志-三人称》

(表2) 先行研究の問題点

益岡ら(89)	・ 「(よ)うと思う」が、相手の意志の有無を尋ねる場合、「つもり」と置き換えられないことの理由が説明されていない。
山田(93)	・ 《意志》の「つもりだ」が「予定」と「意志」とに分けられるという可能性を指摘しながら、その区別の仕方には触れていない。
ニョー(98)	・ 《自己認識》に「仮定した気分」として捉えられる用法があると認めながら、それについて何の説明もない。
安達(99)	・ 「つもりだ」と「気だ」との相違について詳しい説明がない。
吉川(00)	・ 《錯誤》と《仮想》との相違について明確でない。 ・ 《錯誤》に「自身の表明」として捉えられる用法があると認めながら、それについて具体的な説明もない。
三枝ら(03)	・ 確定的なことを表すとき、「(よ)うと思う」と置き換えられない理由について説明されていない。

本論文では、先行研究での問題を解明し、「つもりだ」の諸用法を体系的に説明し、その関係を明確にすることにその目的がある。

2. 本論文の立場

前節であげた先行研究から分かるように、「つもりだ」の研究は、1990年の後半までは《意志》についての研究がその主流をなしていた。それらの研究の中で一致していた見解は、意志動詞の基本形(ル形)に「つもりだ」が接続すると《意志》の意味を表す、ということであった。

ニョー(1998)は、《意志》の用法に関する研究に止まらず、「つもりだ」の諸用法を明確にしようとした。《意志》については、意志動詞の基本形(ル形)だけでなく、「している」形で未来に関わりのある継続相の場合なら、「つもりだ」に接続して意志の意味である《意志表現》を表すことができるとした。特に、《意志表現》の「つもりだ」だけでなく、《自己認識》の「つもりだ」も形式的に整理したというところにその意義があるだろう。

しかし、「つもりだ」において、ニョーの《意志表現》と《自己認識》という二つの概念だけでは、その分類が明確ではないと思われる。吉川(2000)も「つもりだ」の接続形式による分類を行ったが、《錯誤》と《仮想》の分類の基準が明らかでない。このことから、接続形式のような「形態的な基準」だけでは、「つもりだ」の全体像が明確にできないことがわかる。ここから、本論文では、「意味的な基準」による分類を試みようと思う。

そこで、本論文では、接続形式、二人称との共起関係、そして、類似表現との交替現象のような「形態的な基準」と事柄の実現の程度、行為遂行に対する話し手の意図性の存在有無のような「意味的な基準」を用いる。

また、従来の《意志》用法の、「ル形」に接続するという形態的な条件に、「つもりだ」にスケジュール的な意味が強いのか意図性が強いのかという意味的な条件を加えて、「予定」と「意志」との下位分類を試みたい。また、ニョー(1998)の《自己認識》(仮定した気分、除外)や吉川(2000)の《錯誤》用法は、主体の主観的な意図を表すものであるという意味的な条件に、

「評価」は「ル形」に接続し、「照応」は「タ形」に接続するといった形態的な条件を加えてそれぞれ「評価」と「照応」に下位分類する。また「假定」も、主体の主観的な意図を表すものであるため、「評価」や「照応」と同じ用法として捉えられる場合もあった。しかし、形態的にも意味的にも限られた条件で現れる用法であるので、「評価」や「照応」とは異なる用法として分類することにする。

以上のような基準に基づいて、「つもりだ」の用法は、以下のように、五つに分けられると考える。

(カ) 今度も山田さんに投票するつもりですか。(益岡・田窪1989)

「予定」

(1) 「あなたと会えなくなるのなら、あたし、死んでしまうつもりよ」

[ボ] 「意志」

(2) 文江も、若いつもりであるが、……途中で大分息切れがした。

[過] 「評価」

(3) 罨にかけたつもりで、逆に罨にかかり、そのまま病死してしまった。

[女] 「照応」

(4) ぼくはナイフを持ったつもりで右手を明君の胸にぐいと押しつけた。

[偽] 「假定」

(表3) 先行研究と本論文との比較

名柄・広田 ・中西 (1987)	益岡・田窪 (1989)	山田 (1993)	ニョー (1998)	安達 (1999)	吉川 (2000)	三枝 ・中西 (2003)	本研 究 (2006)
意図・決意	意志	予定 意志	意志	意志	意志	意志	予定 意志
			自己認識		(自身の 表明)		評価
仮定				(仮定した 気分)			錯誤
				仮想		仮定	

これらの用法の詳しい説明は、次章からその分類の基準と実例を触れながら説明していくことにする。

Ⅲ. 本 論

1. 「つもりだ」の用法

1.1 「予定」

「予定」は、従来の研究では「意志」を含め、《意志》として取り上げられてきた。しかし、ニョー(1998)でも述べられているように、《意志》の過去の場合、予定変更の意味になるときもあり、意志・意図の不実現の意味になる場合もある。さらに、「つもりだ」が二人称の疑問文に用いられると、失礼な言い方になる場合もあればそうではない場合もある。なぜこのような現象が生じるのであろうか。

それは、予定変更にも、意志・意図の不実現の意味にも、接続形式が「ル形」であることと、まだ実現されていないことを表しているという共通点があるからだと思われる。しかし、本論文では「予定」と「意志」をそれぞれ異なる用法として扱うことにする。この節では、「予定」の用法を明らかにし、次節の「意志」の用法との差異を明確にすることに、その目的がある。

「予定」は、基本的に具体的な行為を表す場合に使われる用法であるが、ただそれだけを条件とするとあまりにも漠然としているので、いくつかの条件をあげながら「意志」との違いを明らかにしたいと思う。

第一に、「予定」は、前述したように「意志」と違って、主体の感情よりスケジュール(決定事項)の性格が強いことがその特徴である。

このことから、「予定」の「つもりだ」は、二人称の主体を持つ疑問文に用いても、違和感なく、ただの予定を尋ねる文になるという特徴がある。

従来、安達などの多くの研究者が、「つもりだ」の《意志》の用法だけを

取り上げて、「意志のモダリティ」として分類している。ここでの「意志のモダリティ」とは、一人称に現われるものであるという特徴があるとされている。しかし、実際に「つもりだ」を見ると、金田一(1953)を含めて多くの研究者が述べているように、その主語が二人称、三人称はおろか、不特定の人称も現れると指摘している。実例をみると、《意志》と思われてきた「つもりだ」に二人称が主体として働くことが分かる。

- (5) 「私の用は長くかかります。多分、何か月も」
「——その間、どこにいるつもりですか？」
「さあ………」 [過]
- (6) ……ところで事件が起こったのはそれからひと月ばかりたった学年末の父母こん談会のときで、明君のおかあさんをはじめ四、五人のくそばばあどもが、先生をこう問いつめたのだ。
「先生は五年生になってもこのクラスを受け持つつもりですか」
「はい、できればぜひ………」 [偽]
- (7) 「わたしが返事を書いて出しておくよ」
「な、なんて書いて出すつもりなんですか」
「せっかくですが、このおはなしはおことわりいたします、と書くつもりさ」 [偽]
- (8) 「この間の凧は、僕たちを乗せるには小さすぎるよ」
「もちろん、もっと大きなものにしなければだめさ」
「どのくらいの高さまで上げるつもりだい」
バクスターがたずねた。
「二百メートルに上がれば、島中が見下ろせる」
「とにかくやってみようや、僕はもう、こんな囚人のような生活はいや

だ」 [十]

(9) ランク なあに、きみの奥さんは、いつもの通りのままで出てくりゃい

いのさ——

ヘルメル まさしくその通りだ。ところで、きみ自身は何になるつもりだ

い？

ランク ああ、きみ、ぼくならもうはっきりきまっている。

ヘルメル なんだい？

ランク 次の仮装舞踏会にはぼくは姿の見えないものになる。

[家]

(5)～(9)は、すべて二人称の主体がくる「つもりだ」であり、どれも「意志」より「予定」の意味合いが強いと考えられる。なぜなら、いずれも、質問の応答が「さあ」「はい」「せっかくなのですが」のように自然な反応をしていることから、相手に失礼な感情を与えていないことが分かるからである。このように、「予定」の「つもりだ」は他の用法に比べ、二人称の主体がくる疑問文の数が多いという傾向が見られる。それは、「予定」の用法は、主体の感情よりスケジュール的な性格が強いう特徴を持っているからであろう。たとえば(5)は、主体が用が終わるまでどこで泊まるか決まっていないことを表している。これはあくまでも主体のスケジュールに対する質問であって、感情に対する質問ではないと思われる。そのために、質問の応答も自然な反応がくるのであろう。そもそも、感情というものは、非常に個人的であり、主観的である。そのために、相手(二人称)がどのような感情を持っているか尋ねるといことは、プライバシーの領域の侵害にあたるとも言えるだろう。しかし、「予定」のようなただのスケジュールを尋ねることは、相手の心証を害さないのので、二人称と共起しても自然な文として成り立つのだと思われる。このことから、「予定」の「つもりだ」は、

後で述べる他の用法と比べ、客観的ともいえよう。

第二に、実現の可能性の保証がある表現が文中にあると「予定」の意味になると思われる。その理由は、実現の確実性からスケジュール的な性格が強くなり、「予定」の意味になるからだと考えられる。以下の例を見ていただきたい。

- (10) 奈良の銀行は預金がなければとるのに保証人が要るかも知れぬという話で、その保証人に頼む {つもり/予定} だった。

「直ぐ行くから先へ行ってたまえ。却々手間どるから」 [佐]

- (11) そのころ、一週間もめっちゃくちゃな放蕩をしたのち、私はもっとも放縦な学生の数人を自分の部屋での秘密な酒宴に招待したのであった。私たちは夜がよほど更けてから集まった。自分たちの乱行をまちがいなく朝までもつづける {つもり/予定} だったのだから。酒は豊かに満ちあふれていたし、それ以外のおそらくもっと危険な誘惑物なども欠けてはいなかった。 [黒]

- (12) ニューヨークでの苦学時代に、星は安楽といっしょに、和英両文で印刷した週の小新聞を発行していたことがあった。ことのおこりは学資のたしにと、日本の新聞や雑誌の面白そうな記事を英訳し、それを新聞社に売って金を得たことからであった。

この「ジャパン・アンド・アメリカ」という小新聞は、日本の記事のをせ、在留邦人には故国のニュースを知らせ、米人には日本への理解を高めさせるのが目的だった。人のためになり、実益をも兼ねる {つもり/予定} だったが、好評にもかかわらず、資金の面ではさんざん悩まされた。 [人]

(10)をみると、具体的な時が示されていないが、主体が相手に先に行け、自分も直ぐ行くと言っていることから、保証人に頼むという行為が近いうちに行われることが分かる。(11)をみると、私たちは朝まで乱行を続けることはまちがいないことであると予定したために、夜がよほど更けてから集まったということを表していることが分かる。また(12)は、経験の上、和英両文で印刷し発行すればお金になるということが分かり、人のためになって実益も兼ねることは当然のことだと予定して小新聞に日本の記事をのせたことが分かる。

このように、ある程度決まった予定を表すという共通性から「予定だ」とも置き換えられると考える。このことについては、2.1節で改めて説明することにする。

最後に、具体的な時の表現と共起すると、実現の可能性が高くなり、そのことからスケジュール（決定事項）の性格が強くなってくる。

(13) 綾子は、しばらく庭から目を離さなかった。大分白くなった髪を、明日は黒く染めるつもりである。[勝]

(14) 「五月にフレンツツェへ行くんですってね」

「なんだって？」

「だって、あのひとが言ってたわよ。今年の五月にツトムくんとイタリア旅行するつもりだって」 [レ]

(15) 女の動きまわる気配は、休みなくつづいている。モッコが何度か近づき、また遠ざかって行った。こんなことでは、明日の仕事にさしつかえる。明日は、夜明けと同時に起きて、まる一日を有効につかうつもりだ。寝ようとすればするほど、かえって気が立ってくる。眼がひりつき始

めた。 [女]

(13)～(15)をみると、「明日は」「五月に」のように具体的な時を表すものと共起していることが分かる。特に、(14)に「五月にフィレンツェへ行くんですってね」から、イタリア旅行をするということは決まった事実であることが分かる。(15)も同様な例である。

(16) たったいま母が重病だという電報を受け取りました。四時三十分の汽車に乗るつもりです。弟のサムが向うの駅へ迎えにきてくれることになっています。 [O]

(17) 四人は、十六日の夕方大熊岩へもどり、翌朝から東方川を左岸沿いに歩いて、夕方ここに着いた。ここで一夜を明かし、翌朝早く洞穴へ向かって出発するつもりであったのだ。

六人はボートに乗り込んだ。午前四時ごろ、ボートは、ゴードンたちが出迎えるニュージーランド川の船つなぎ場に着いた。 [十]

(16)をみても、四時三十分の汽車に乗るということはそのチケットをとったか時刻表を確認してその汽車に乗ろうと準備をしたことと、弟にもこのスケジュールを知らせたことが文の内容から読み取れる。また(17)は、翌朝早く出発するということは四人で決めたことであって、そのことからスケジュール的な性格が強くなってくるのではないかと思う。

ここで、「予定」用法と「意志」用法の共通点と違いを簡単にまとめると次のようになると思う。

まず、「予定」とは、主体の意志によって設定される場合がほとんどであり、

そのため次節で述べる「意志」用法と厳密に区別するのは難しいことは事実である。しかし、「予定」は実行の可能性が確実にあるという点で「意志」と一線を画す。「意志」の用法は、実行の可能性が不確実なため、二人称と共起させて、「あなた～するつもり？」という形の疑問文で用いると、失礼な感じを与える。しかし、「予定」の場合、実行の可能性が確実にあるため、二人称と共起させて疑問文で用いても失礼にならないのであろう。

これらの特徴をまとめると、(表4)のようになる。

(表4) 「予定」の特徴

- | |
|---------------------|
| ※主体の個人的な予定を表す |
| ※実現可能性のある表現と共起 |
| ※二人称の主体を持つ疑問文に用いられる |

1.2 「意志」

「意志」は、従来の研究では「予定」を含め、《意志》として扱われてきた用法である。しかし、前節でも述べたように共起関係や交替現象などが異なることから、「予定」とは別の用法として下位分類する。ここでは、前節の「予定」に引き続き、「意志」の性格を究明することによって、「予定」との違いを考察したい。

「意志」は、「予定」と同じく接続形式が「ル形」であり、まだ実現されていないことを表す用法である。しかし、この用法は、スケジュール的な性格が強い「予定」と違って、主体の動作の裏にある意図が実現されるように望むという、主体の個人的な感情が含まれた意志を表すものである。そのために、今ま

で多くの研究が指摘したように、「意志」は「(よ)うと思う」と、置き換えができると思われる(このことについては、また2.2節で説明することにしたい)。それでは「意志」の用法について、いくつかの条件を挙げながら考えていくことにする。

第一に、「意志」には、主として行動に関わる動詞が「つもりだ」に接続する「予定」と違って、基本的に主体の感情に関わる表現が現れる。それは、(18)～(20)の例をからも明らかである。

(18) 良人の云い分はこうだった。岸本のこの事に処する態度の公明正大である事を先ず十分に認め、それで自分の方でもこれを匹夫匹婦の痴情の争いには、したくない。で、薫さんの心がそれ程まで貴方の方へ傾いているものなら、自分の方も薫さんに対する愛がさめたわけではないが、潔よく彼女をあきらめるつもりだ。けれども、只一つここに条件がある。それは薫さんの胎にある子供の事で、この未だ見ぬ児に対する父親の責任として、このまま薫さんを米国へやってう事はどうも忍び難い。 [佐]

(19) 「ところでどうだ、夜もふけた。ぼつぼつこの生原稿の中に帰った方がよくはないかい」
「いやいや、わたしはもうちょっと世の中に出ていたいんでさ」
「いかん！」
まるはだかのまま、フン先生はブンと名乗ったそいつにとびかかった。押えこむつもりだったのである。しかし、そいつはもうそこになかった。フン先生が、あっけにとられてきょろきょろあたりをみまわしていると、上の方から声がした。 [ブ]

(20) 「見て御覧。Aは〇〇さんだ」

妻は無心にそれを受け取ったが、見ようとしなかった。

「だけど、可笑しいわね」

妻は自身の気持を調べるような眼つきをしながらいった。

「若し私に少しでも疚しい気持があれば、お父様に色々お話はしないわね」

実際彼が見舞に行く度に、妻は浮々とした心持でその男の噂をした。

「それはそうだ」

「そうよ。私の心持は親切にして下さるのをお父様にも喜んで頂くつもりだったと思うわ」

「然し好きになったら大変だと思ったのはやはりあの医者じゃあないか。……俺はこれにも書いたように、それだけの意識さえお前にはないと思っていたのだ」 [佐]

(18)～(20)の例のように、それぞれ「彼女をあきらめる」「押えこむ」「喜んでいただく」などの、主体の感情に関わる表現がくることが分かる。これらの感情に関わる「意志」の用法は、主体の努力と関係なく実現されない場合もあるため、必ずしも実現するといえないことから、「予定」と異なる用法であることが説明できよう。

第二に、感情ではなく行動に関わる動詞が「つもりだ」に接続するものの、文中に主体の動作の裏にある意図を表す表現があると、主体の個人的な感情が含まれた意志を表すという特徴がある。このことは次の例をみると明らかである。

(21) ヘルメル君がこの手紙を見れば、いずれ返事があるでしょう。ところでよく覚えておいてください、わたしにこんな手段を取るようにしむけたのはあなたのご主人自身なんですぞ。これだけは絶対に勘弁しないつもりです。では奥さん、さようなら。 [家]

(22) 相手方では「講義は星、投票は比佐」という名文句を考え出し、連呼しはじめている。運動員たちは気が気でない。星にこう申し出た。

「せめて、清き一票を私に、と壇上でおっしゃって下さい」

「それは言えない。その言葉は最後まで口にしないつもりだ。これぐらい理屈にあわない文句はない。それを連呼したら、なんのために政治教育をしているのか、わからなくなってしまうではないか」

[人]

(23) 長いお手紙になりそうでございます。あなたは、あるいは途中でこの面白くもない手紙を破り捨てておしまいになるかもしれません。ですが、私はそれでも最後まで書いてしまうつもりでございます。少なくとも、あの事件の最も大きな被害者であった私が（それはお前ではなく、この俺の方だとあなたは仰言るかもしれませんが）、当時、どんなことを考え、どんなふうになりの結論を導き出したのかということ、ありのままにお話しておきたいのでございます。 [錦]

まず、(21)の例をみると、「勘弁しないつもりです」だけでも、主体の感情を表すものであるため、「意志」の用法と解釈されるが、さらに「絶対に」がつくことによって主体が強調されていることが分かる。また、(22)や(23)も同じく、主体の「つもり」に「最後まで」がついて、主体の感情が強調されている。

- (24) さらに部落の仕打ちのことを考えに入れば、おれがうけた被害は、とうてい計算しつくせないほどになる。二人のあいだの、個人的な貸し借りなど、問題ではない。いずれ徹底的な復讐をしてやるつもりだが……ただ、どうすれば最大の打撃になるのか、そのところがまだよく分からない…… [女]
- (25) 「でも実は、良すぎて困っている。デンバーにノーベル食品という卸しの食料品店があってその番号が四三三ー六一ー一なので、やたらに間違い電話が多く、ひどい時には一日数回に及ぶこともある。しかも、朝の七時前ぐっすり眠っている時に、どこかのレストランのおやじからピザー用のメリケン粉の注文が来たりするのだからね。全くあの時は頭に来て、怒鳴りつけてやりたかったけど、寝呆けていて何を言ってよいか分らなかった。今でも残念だ。今度はあらかじめ呪い文句を作文しておいて、電話に向かってかなりたててやるつもりだ」 [若]
- (26) 行助は、少年院をでたら、ここでの面白い生活を友達に話してやるつもりだ、と寺西保男に語ったが、天野敏雄が、初等少年院の経験を面白おかしくかつての学友に語りきかせた行為は、あきらかに行助とは発想がことになっていた。 [冬]

(24)～(26)では、「つもりだ」に前接する動詞に「てやる」がつくことで、主体の「絶対～してやってみせるのだ!」のような気持を表している。これらの用例には、主体の動作の裏にある意図が実現されるように望むという感情が現れ、「意志」を表すことになるのだと思われる。

第三に、「意志」の用法は、二人称の主体がくる疑問文では、限定され

た場合にしか用いられない特徴がある。それは、すでに前節でも述べたように、相手(二人称)の感情を尋ねることは、プライバシーの領域の侵害にあたることになるので、失礼な表現になるからである。

(27) 「私が帰ったからって、どうにもならないわよ」

と文江は言った。「私を殺してもね。——私の恋人や、それに県警の室田さんは、もう真相をうすうす察しているのよ。どうするの？みんな殺すつもり？」 [過]

(28) 「裏で、なにをやるつもりなんですか」

「とぼけたことを聞く野郎だな」 [偽]

(29) (なにを下らない！ 正常という規準がなけりゃ、異常だって成り立ちっこないじゃないか！)

(おやおや、人がせっかく、弁護してあげようと思っているのに……)

(弁護だって……？)

(いくら君だって、まさか、自分の有罪を主張したりするつもりじゃないんだろう？)

(あたりまえじゃないか！)

(それなら、もっと素直にふるまってほしいものだね。いくら自分の立場が例外だからって……) [女]

(27)の場合は、相手の感情を探り、プライバシーの領域を侵害したことからくる失礼なニュアンス、つまり、叱責の意味まで表していると解釈される。(28)や(29)でも、「裏で」と共起して相手がどのような感情を持っているかを探っており、失礼なニュアンスになっていることが、答えの反応(怒り)から読み取れる。

- (30) 「はっきり申し上げます」
「うん、何だ？」
「私をからかうおつもりですか？」
「からかう？」
「何を言うか！ 私は本気だぞ！」 [乾]
- (31) 「聖さま、あなたは少しもわかろうとなさらない。あなたの思っていないさ
る結婚がどういものかわきまえておいで？ 親からも親戚からも見
捨てられるのですよ。何不自由なく育てこられて、英語教師の
給料でどうやって暮してゆくおつもり？ あなたは一ぺんだって御飯
を炊いたことがおあり？ 手鍋さげてもというのは唄の文句です。ど
んなみじめな……よくお聞きなさい、あとになってどれほど欺かれて
後悔なさっても後の祭りですよ」 [楡]

特に(30)や(31)をみると、丁寧の接頭辞である「お」が付いているのにもか
かわらず、後からくる反応から失礼なニュアンスを与えていることが分かる。この
ことから、丁寧な表現であるかどうか、「つもりだ」が二人称の疑問文に用
いられてとき失礼な表現になるかどうか判断する基準とは言い切れないと思われる
(Ⅱ.1.4参照)。

最後に、「意志」は、ある条件が満たされた場合は、その行為に移すという
意味の文に現れるときが多い。それでは、次の例をみていただきたい。

- (32) 今年は礼儀を正しくしよう、と決心したが、それも食えている間だけの
話だ。物価がべら棒に上ったり、生活が不安になった時には、いつ
でも礼節を知らざる者に逆もどりするつもりである。ボクシングの藤選手

に大和魂があるなら、私にも泥水すすり草をはみつつ半島を縦断して来た引揚者魂がある。 [風]

- (33) 自分は頼央の精神史を研究に来た女子大生なのだ、と、自分に言い聞かせながら七瀬は答えた。「それじゃ奥さんは、お亡くなりになったのではないんですか。あのう、それを論文に書くか書かないかは、わたしとしてはそれがどの程度現在の頼央さんの絵に影響しているかをよく考えてからにするつもりです。教えていただけないでしょうか。いったいどうなされたのでしょうか」 「うん」 木下はまた腕組みした。

[エ]

(32)をみると、生活が不安になった時には礼節を知らざる者に逆もどりしているが、もし生活が不安にならない場合は逆もどりをしなくて済むことが分かる。(33)も(32)と同じく、論文に書くか書かないかは絵に影響しているかどうかによって決まるのである。それは、もともと行為に移さない可能性が主体の意志に含まれているため、実際の行為に移さなくてもそれは主体の意志だということになるだろう。それでは次の例をみよう。

- (34) 「ねえ、別れるのはいやよ。あたしを捨てないで」
「しかし、これ以上つきあうのは、おたがいのためにも、意味ないと思うんだが」
「あなたと会えなくなるのなら、あたし、死んでしまうつもりよ」
……しばらくして、彼女が自殺したのだ。 [ボ]

- (35) 然し其処まで締切を引張っては雑誌社の方を断る事は出来なかった。それに遂に出来なかったと云うのは父にも何か気の毒な気がした。彼は上高畑の友を訪ね、読んで貰った。そして友がつまらないと

云えばよすつもりだったが、友は、「この前のよりいいように思う」と云った。彼は出す事に決めた。 [佐]

(34)と(35)は条件文での「つもりだ」である。(34)の場合は、私はあなたに会えなくなると死ぬという意志を持っているが、逆に、あなたに会えると死なないということも、主体の意志なのである。(35)も同様な例である。言い換えれば、「意志」には、(32)や(33)と同じく、それはあくまで主体の意志であるため、実際に行為に移さなくてもいいし、その事象が実現しなくても良いという意味合いがあるといえよう。

これらの特徴をまとめると、(表5)のようになる。

(表5) 「意志」の特徴

- | |
|-------------------------|
| ※主体の感情に関わる表現と共起 |
| ※行動に関わる動詞の中、意図性の強い表現と共起 |
| ※実現しない可能性が含まれた場合(条件文多) |
| ※疑問文に二人称と共起すると失礼な表現になる |

1.3 「評価」

本論文では、「これでも若いつもりです」のように、主体の主観的な評価を表す用法を「評価」と呼ぶ(以下、「評価」)ことにする。従来の研究での「評価」は、主体の主観的な意図を表すものだという意味的な共通点から「照応」や「仮定」と同じ用法として捉えられてきた。

ニョー(1998)なども、(レ)と(ロ)を同じ用法として捉えている。しかし、次の例を

みると分かるように、それぞれ「つもりだ」を同じ用法として扱うには無理があるように思われる。

- (レ) 「私のところへ来た分は全部読んでいるつもりです。この報告書は、いまはじめて見せられたので、別ですが……………」(ニョー)
- (ロ) 太郎はできるだけ穏やかに言ったつもりだったが、五月さんは、その言葉に、少しじろいだように見えた。(ニョー)
- (ワ) 「大丈夫かしら、たい子さんって人、貴女の親友にしちゃあ、随分冷たい人ね、泊めてくれるかしら……………」
「大丈夫よ、あの人はあんな人だから、気にかけないでもいいのよ、大船に乗ったつもりでいらっしやい」(ニョー)

(レ)の場合は、主体が今まで来た分の報告書を全部読もうと意図しており、実際にも全部読んでいることは事実である。しかし、(ロ)の場合は、主体が穏やかに言おうと意図しているが、実際には穏やかに言ってないことが相手の行動からうかがえよう。さらに(ワ)の場合は、現実には不可能なことを実現できたかのよう、意図的に仮定した表現であるといえよう。言い換えれば、(レ)は、主体が現在もそうであると意図していることであるのに対して、(ロ)は、主体がその行為を実行に移した時点ではその意図であったことを表しているため、発話時には必ずその結果が現れているのである。また(ワ)は、仮定を修辭的に用いて主体の意図を表現している。

以上の理由から、本研究では、ニョー(1998)などにおける《自己認識》の用法を「評価」と「照応」「仮定」の三つにさらに下位分類して考える。そして、本節では、「評価」の特徴を明らかにすることによって、「照応」や「仮

定」との違いを究明したいと思う。以下、「評価」の意味になるいくつかの条件を、実例を挙げながら説明していく。

第一に、「評価」は、「ル形」に接続して現実世界において主体が下す主観的な評価を表すという特徴を持っており、すでに実現されていて現在の状況と照らしあう表現である「照応」と異なる。言い換えれば、主体がある事象に対して、何らかの意図を持っているとき、それを自己認識する表現である。ただ、この場合の判断は、極めて個人的なものであるため、実際にどうであるかは問題にならない。このことは、次の例をみると分かると思う。

(36) わたしは彼女など、自分のようなものにとってはとても手の届かぬ高嶺の花だと思っていますから、母親の死後村の若者の間で彼女の争奪戦がますます激しくなったなどというそんな噂を聞くたびに、いったい誰の家へ嫁に行くのかと思い、心配しながらその争いを圏外から見まもっておりました。いや、見まもっているつもりだったのです。

そんな時、ある日ふらりと立ち寄ったわたしに、珠子は一冊の婦人雑誌を見せてくれました。[エ]

(37) 高木はついこの前まで同じ編集部にいた同僚であるし、彼の性格というのはよくわかっているつもりだった。彼なら突如としてマイコのそばに行き、「ぼくは君のことがとても好きなんだ。だから交際してください」などというぐらゐのことは難なくやってしまうだろうと思った。しかしよほど酒に酔って、ということならまだしも普通の状態では自分にはとてもそんなことはできないだろうと思った。[新]

(38) 「……小ツやんや早苗さんじゃとて、やっぱり海千山千よ。ただその筆頭が、わたしとマツちゃんかな。でもやっぱり、人はわるうな

いですよ。苦勞しただけ、ものわかりもええつもりです。ミイさんのような賢夫人や、小ツやんや早苗さんのオールドミスのおえらがたにはできんことも、わたしらはするもん。なあマツちゃん、おおいにやろう。」 [瞳]

(36)をみると、主体がその争いを圏外から見まもっていたと述べた後、すぐ見まもっているつもりだったのだと言い直したことから、結果的にはどうであれその当時は見守っていたという主体の判断を表していることが分かる。(37)をみても、主体は、高木が同じ編集部にいる同僚であったことを根拠としながら、自分自身は彼の性格をよく分かっていると判断している表現であることが分かる。(38)も同様である。これらの例における判断の主体は「つもり」の主体と一致しており、この判断は主体自身の考えに過ぎないというニュアンスを与えることで和らげの表現としての働きもあるのではないかと思われる。このような表現を使って、この判断はあくまでも主体の主観的なものであり、実際には違う結果になる可能性もあるということも含めた表現になるのであろう。次の例をみると、そのことがより明確になると思う。

(39) 村まで、二人は走った。文江も、若いつもりであるが、何しろ運動不足は如何ともしがたい。途中で大分息切れがした。 [過]

(39)の例をみると、主体である文江は自分のことを若いと評価しているが、それはあくまでも話者が自分自身に対して主観的に判断した評価であるため、他人の反応や実際の結果がどうであるかは関係ない。また、「途中で大分息切れがした」からも分かるように、実際にはそれほどの体力を持っていなし、結果的に主体の評価と現実との間にズレが生じていることを表している。こうしたズレが

あると、「照応」と混同しやすくなるのではないかと思う。しかし、次に述べるような場合にも、「評価」の意味が成立する。

第二に、「評価」の表現には、主体の判断と現実との間にズレが生じる場合もある。

(40) キッと百代をにらんだその目つきは、見たこともない、恐ろしいものだった。

百代はあわてて歩き出した。いや、歩いているつもりだったが、いつの間にか走り出していた……。 [過]

(41) 「そうなさりたければ、コカ葉を立ちぐされにするよりは、まだけっこうでございましょう。しかし、当局もアルカロイド産業における私の努力を、よくご存知のはずです。もう少し親切な扱いをお願いできないのでございましょうか」

「きみには、きみの気づかぬところで親切をつくしてやっているつもりである」

「どうぞ親切なのか、思い当る点がございませんが……」

[人]

(42) シェファーさんは、しかし、川の中に丸太が横たわっていたのに気づかず、つまずいてどっと倒れた。自分ではまだ走っているつもりだったが、足のほうでいうことをきかず、ただバタバタと水を打っているきりだった。海ガメが仰向けに岸へうち上げられたのとそっくりだった。 [テ]

(43) 「あなた、何をしていますのです」

「まあまあ、そんな種の蒔き方をして。それじゃ、とても芽を出しはしないわよ」

「種を蒔いているつもりじゃなかった」

「それじゃ、何をしていたの」

「考えごとをしていたんだ」 [砂]

(40)では、主体である百代は歩いていると判断していたが、実は走り出していたことが分かる。また、(41)でも、主体は相手に親切をつくしてやっていると判断していたが、相手にはそれが伝わっていない。(42)や(43)も同じく、主体と現実との判断にズレが生じたことが分かる。このように、「評価」の用法でも、主体の意図と現実との間にズレが生じることがあるため、「照応」と同じ用法として捉えられたのである。しかし、「評価」の場合は、そもそも主体の個人的な判断を問題にしているだけであり、「つもり」を持っている時にはその結果のことは問題にしない点が「照応」と異なる。そのため、結果的には現実との間にズレが生じたとしても、「照応」とは別の用法として捉えるのが妥当であろう。

第三に、「評価」の「つもりだ」は、多くが程度副詞³⁾と共起していることが特徴としてあげられる。西原(1991)によると、程度副詞は見積りの程度と共に話者の判断を表す働きをすとしている。ここから、程度副詞によって、主体の主観的な評価における基準を指定できることが分かる。さらに、基準を設定することによって、その評価における判断に、ある程度の妥当性を与えることができ、その評価が妥当であると思わせる働きをする。

(44) ま、教師たちのつらい立場は、これから聞いてすこしは知っているつもりです。 [偽]

3) ここで、「程度副詞」であるかないかは、西原鈴子の「第2部 副詞の意味機能」(1991)を参考にしたものである。

- (45) 「あなたは私に責任があるんだと思ってやしませんか」
「いいえ」と私が答えた。
「どうぞ隠さずに言ってください。そう思われるのは身を切られるより
つらいんだから」
と奥さんがまた言った。
「これでも私は先生のためにできるだけのことはしているつもりなんです」 [こ]
- (46) 「自分でかせいで、そのお金で、お酒、いや、煙草を買いたい。
絵だって僕は、堀木なんかより、ずっと上手なつもりなんだ」
このような時、自分の脳裡におのずから浮びあがって来るものは、
あの中学時代に画いた竹一の所謂「お化け」の、数枚の自画像で
した。失われた傑作。 [失]
- (47) 「……その頃はね、それが少しも苦にならなかった。勝負は、もうど
うでもよかったんだね」
ディレクターが、また新たな質問を投げかけようとマイクを自分の口
元まで持っていった時、私の傍に立っていたエディが不意に私の耳元
で囁いた。
「大戸はですね……」
エディにはその場と関係ないことを唐突に喋り出すという癖があり、そ
れには充分慣れているつもりだったが、インタビューに聞き入っていた
私はこの時もやはりびっくりさせられてしまった。 [一]

まず(44)は、「すこしは」という基準を設定して、その範囲の中では知っている
と主観的な評価をしているのである。ここでの「すこしは」という程度副詞は、
最小の程度を表す副詞であって、最小程度の基準よりは知っていると評価を

し、その評価に妥当性を与えようとしているのである。

もし、「すこしは知っています」のような断定的な表現を用いると、基準設定ができて妥当性は与えられているものの、そこには主観的な評価という意味がなくなるため、現実とのズレができる余地がなくなる。つまり、主観的ではなくなった分、責任感が必要となるのである。これに対して、「すこしは」のような程度副詞がなくなって「知っているつもりです」だけの表現になると、基準も設定できていないため、その評価には何の妥当性も与えられなくなる。この理由から、責任を避ける自己主張にはこのような「評価」の用法を用いることが多いと思われる。(45)～(47)の場合も、(44)と共通した理由から用いられた表現であろう。

次の例は、程度副詞は用いられていないものの、程度を表すものと共起している場合である。

(48) 「それだけのサービスはしてるつもりだぜ」

「そうね。フェラーリまで抜かせたんだもの、それなりのお礼はしなく
ちゃね」 [レ]

(49) シェファーさんは、しかし、川の中に丸太が横たわっていたのに気づかず、つまずいてどっと倒れた。自分ではまだ走っているつもりだったが、足のほうでいうことをきかず、ただバタバタと水を打っているきりだった。海ガメが仰向けに岸へうち上げられたのとそっくりだった。 [テ]

(50) その食堂へ足を踏み入れるたびに、私はいつも泰平ムードにたるんだ皮膚を鞭打たれるような感じがするのだった。そこは、余りにも敗戦直前のブラック・マーケットに似ていた。

私はそれまでに、ほぼ人生と現実というものの仕組みを、自分なりに理解しているつもりでいた。しかし、これほど鮮やかなコントラストをもっ

てその表裏の縮図を示されると、やはり一種の感慨を覚えずにはいられなかった。 [風]

(51) 高木はついこの前まで同じ編集部にいた同僚であるし、彼の性格と
いうのはよくわかっているつもりだった。彼なら突如としてマイコのそばに
行って、「ぼくは君のことがとても好きなんだ。だから交際してください」
などというぐらゐのことは難なくやってしまうだろうと思った。 [新]

(52) 失望というより、あまりのことに呆然としてしまう。それぞれの者は感想
をもらった。

「ぼくは外国の事情にはいくらかくわしいつもりだが、こんな前例はど
こにもない。だれが考えついたことなのだろうか」 [人]

(48)~(52)の例も、副詞は用いられていないものの、「それだけ」や「いくら
か」「自分なりに」などの表現を用いて、(44)~(47)と同じく、主体の評価に
妥当性を与えながらも主観的な評価であることを表している。これらは、何かの
根拠によるものではなく、極めて個人的な判断であり、それは主体の主観的な
尺度によるものである。そのため、相手の評価を想定して質問することはできなく
なり、二人称の主体を持つ疑問文は非文となるのである。

これらの特徴をまとめると、(表6)のようになる。

(表6) 「評価」の特徴

- | |
|----------------------|
| ※現実の主体が下す主観的な評価 |
| ※評価の結果は問題にしない |
| ※程度副詞と共起(ある程度客観化) |
| ※二人称の主体を持つ疑問文に用いられない |

1.4 「照応」

本論文では、「本流と見てこいだつもりなのに、右にそれる」のように、事態の成立の前、主体の持っていた元の意図を表す用法を「照応」と呼ぶ(以下、「照応」)ことにする。ここでの「照応」は、主体の意図と現実を照らしあわせ、その間にズレが生じることを表す意味で、「つもりだ」の一つの用法を表すため、本研究においてあらたに設定した概念である。

「評価」は、「つもり」を持っている時点を基準として、そうであると主観的に判断した表現を指すものである。それに対して、すでに行われたことを主観的に判断するという意味で、「つもりだ」を用いて表現する用法が「照応」である。本節では、「照応」のいくつかの特徴を実例を挙げながら考察していきたいと思う。

第一に、「照応」は、現実の結果として現れた自分の意図を伝えようとする表現であるため、「タ形+つもりだ」という形式で現れる。言い換えれば、主体の意図を現実に照らし合わせた表現であるともいえよう。

(53) 医師は私の手記を、記憶の途切れたところまでを読み、媚びるように笑いながらいった。

「大変よく書けています。まるで小説みたいですわね」

「僕はありのままを書いたつもりです」

「ははは、そうです。そこです。あなたがありのままと信じているところに、真実を修正する作用が働いているのが特徴でして、これは小説家にも共通した心理なのです」 [野]

(54) 「私も姑の苦労はしたつもりやけれども、なんというても旦那さんを産んでくれたおひとやよってに、忍の一字があるのみやと申すてまし

たえ。私らは加恵と違って箸の上げおろしにも小突かれ続けやった。較べものにもならなんだわの。こんなに嫁が憎いものか、なんでやろかと考えこんだくらいやったよし、悪阻で寝ていれば気のゆるみというて叱られたし……」 [華]

(55) 夕食が済むと、わたしは庭へ出て行ったが、鉄砲は持たなかった。わたしは、『ザセーキン家の庭』へは近寄るまいと心に誓ったつもりだったが、うち勝ちがたい力に引かされて、ふらふらその方へ足が向いて——しかもそれが、無駄ではなかった。 [は]

(56) 胡亥は大秦帝国の支配者となるにはあまりに無個性、無気力で、快樂にたいする内在的な趣味におぼれきっていた。女と宦官にとりまかれて彼は衰弱しきっていた。それを見て、ある予言者は、皇帝に、秦を亡ぼすものは胡である、という主題を提出した。彼はその言葉で胡亥を暗示したつもりだったが、皇帝はこれを「胡族」と理解した。その結果、三〇万の遠征軍が派遣され、総動員令が下されたのである、という風評を私たちは幾度となく聞いた。 [王]

(53)をみると、相手である医者に小説みたいだといわれ、主体である僕がありのままを書いたと、自分の意図を伝えていることが分かる。(54)～(56)の場合も、主体である私がそれぞれ、「忍の一字で」耐えたとはいえ、「姑の苦勞をした」「近寄るまいと心に誓った」「胡亥を暗示した」と自分の意図を伝えている表現である。

第二に、(53)～(56)の例からも分かるように、「照応」とは結果として現れている自分の意図を伝えようとする働きがあるため、意図を表す多くの表現と共起する。

- (57) 「オレ、つまり、その時アップシューズはいてて、駅員の足、わざと何度も踏んだつもりだったのさ。そしたら、俺の胸の辺で、『あなた、私の足踏んでるのよ』という女の人が出たんだ。それが小管さんだ」 [太]
- (58) 「ま、まさか。暗号をかくせるほど、ぼく、頭はよくありませんよ」
できるだけさらっと言ったつもりだが、ぼくの声は震えていたようだ。……
- 「東大君、きみはわたしが『暗号』といたら、顔色を変えたね……どうも匂うな」 [偽]
- (59) 「ま、人のことにして。おまえだってすすんでなかったじゃないか。おかあさんの二の舞いふみたくないって。まったく老眼鏡かけてまで、人さまの裁縫はしたくないよ。」
- 「そのほうがまだましよ。一年から六年まで、わたしはわたしなりに一生けんめいやったつもりよ。ところがどうでしょう。男の子ったら半分以上軍人志望なんだもの、いやになった。」
- 「とき世時節じゃないか。おまえが一文菓子屋になって、戦争がおわるならよかろうがなあ。」 [瞳]
- (60) Kはどうしてもちょっと踏み留まって自分の過去を振り返らなければならなかったのです。そうすると過去がさし示す道を今までどおり歩かなければならなくなるのです。そのうえ彼には現代人のもたない強情と我慢がありました。私はこの双方の点においてよく彼の心を見抜いていたつもりなのです。 [こ]

(57)～(60)の例から、「照応」は、「わざと」「できるだけ」「一生けんめい」「よく」のような意図を表すものと共起し、後接の内容から現実と照らし

合わせていることが分かる。このことから、「照応」は、結果として現れた意図を伝えようとしている表現であるといえよう。しかし、これらの意図は、どの場合も現実との間にズレが生じており、違った結果になっている。したがって、結果は違うのにもかかわらず、わざわざ自分の意図はそうではなかったことを表すということから「言い訳」の意味に解釈できるといえよう。

第三に、すでに述べた通り、「照応」は、主体の意図と違った結果になった時に使われる表現であるため、「はずだ」と置き換えができる。

(61) 競走ならむかしから得意だった。大股でしたこら走ったもんだ。だが問題は、どんなに足が早かろうと、また事実自分でいうのもおかしなもんだが、かなりうまくやった {つもり／はず} だったのだが、あのパン屋の一件のあと、とうとう警察にバクられてしまったことだ。 [長]

(62) 宮が、流浪中の源氏に意外に冷淡であられたのを、源氏は忘れることができなかつた。かねて源氏は、兵部卿の宮を、親しく思い、心をひらいてつき合い、好意をもちつづけてきたではないか。愛する紫の君の父君であり、また、ひそかな憧れを捧げる藤壺の中宮の兄君でもある人として、二重の縁の深さを思い、敬愛を抱いて、接してきた {つもり／はず} だった。それなのに、兵部卿の宮は、源氏が須磨へ追放されると、弘徽殿の太后や右大臣側の思惑をおそれて、とたんに交わりを絶ってしまわれた。 [源]

(61)と(62)は、「照応」の「つもりだ」を「はずだ」に置き換えた例である。この例からは何の違和感も感じられない。このように、「照応」の「つもりだ」が「はずだ」と置き換えが可能である理由は、両方とも現実にズレが生じ

た場合に使われる表現であるからだと思う。これに関しては2.3節で考えてみたいと思う。

最後に、「照応」の「つもりだ」が、二人称の主体を持つ疑問文に用いられるのは、極めて限定された場合に限られるという特徴がある。これは、人称に制限があり、プライバシーの領域を侵害することになって、失礼な表現になるというところは「意志」と変わらない。しかし、その数が「意志」より格段に少ない。

(63) 婦警のスカートはややタイトにできていて、そのままでは、思いきり蹴飛ばすことができないので、みな黒いパンティストッキングが上から押さえている白いショーツのはしが見えるところまであられもなくまくりあげて、

「この捜一別の恥さらし」

「それでもおまえは心を入れ替えたつもりなのか」

と、思いきり力強く蹴りまくるので、二、三時間は痛くて起き上がれないほどのダメージを受けてしまう。[ズ]

(64) 踏絵を踏めと言った私の奨め通り、キチジローがまずそれに足をかけ、次にモキチとイチゾウがそれに従いました。だが、これで許されると思っていたのが間違いでした。居並んだ役人たちの頬にうす笑いがゆっくりと浮かびました。彼等は三人が踏んだという結果よりその時の顔色をじっと窺っていたのです。

「お前らは、それでお上をだましたつもりか」と役人のうちの年とった者が申しました。[沈]

(63)の場合は、おまえが心を入れ替えようと意図したかを尋ねており、(64)の

場合は、お上をだまそうと意図したかを尋ねているため、プライバシーの領域の侵害し、失礼なニュアンスになる。そもそも「照応」というのは、意図と現実との間にズレが生じた時に使われる表現であるため、その違った結果からくる「叱責」の意味も持つことができるといえよう。

これらの特徴をまとめると、(表7)のようになる。

(表7) 「照応」の特徴

- | |
|-----------------------------|
| ※ 現実に結果として現れた自分の意図 |
| ※ 意図を表すものと共起 |
| ※ 意図と現実との間にズレが生じる |
| ※ 二人称の主体を持つ疑問文に用いられると失礼(少数) |

1.5 「假定」

本論文では、「大船に乗ったつもりでいらっしゃい」のように、主体が仮に想定した意図を行動に移すことを表す用法を「假定」と呼ぶ(以下、「假定」)ことにする。従来の研究では、この用法を「評価」や「照応」と同じ用法として捉えたり、異なる用法としても捉えてもその区別がはっきりしていない場合が多い。

例えば、名柄ら(1987)は、「過去形+つもり」は現実と違う状況を假定した用法であり、「照応」と同じ用法として説明しており、吉川(2000)は、別の用法として取り上げているものの、「大もうけするつもりでいるんだ」のような場合は、《意志》にも《錯誤》にも《仮想》にも解釈できるとしている。このようなことが起きる理由は、いまだに、「つもりだ」の研究が体系的に行われてないからであろう。

そこで、この節では、「仮定」の特徴を明らかにすることで他の用法との違いを明確にしたいと思う。

第一に、「仮定」は、すでに述べたように、主体が仮に想定した意図を行為に移すことを表す用法であって、「つもりで」のように「で」を付加した決った形で「タ形」に接続して現れるという特徴がある。

この場合は、たとえ、接続形が「タ形」であっても、「仮定」は過去のことを表すものではなく、これから行う行動を表す表現である。その理由は次の例で確認しながら説明することにする。

- (65) 「ナイフを構えて、遠藤先生をよくもひどい目に会わせたな、と突き
当って行くのはどうだろう」

ぼくはナイフを持ったつもりで右手を明君の胸にぐいと押しつけた。

[偽]

- (66) 死んだつもりで生きていこうと決心した私の心は、時々外界の刺激
でおどり上がりました。 [こ]

- (67) 「きたな、鰐公」

川面を見ると、鰐が丸太ン棒のように、すーっとこっちへ流れてくる。

「ばかな鰐公め。丸太ン棒に化けたつもりでいるぞ」

ジョンは、丸太ン棒をしっかりとぎりしめた。神経は張りつめるだけ張りつめている。身体中の筋肉が次に起こす行動に備えて総動員されている。 [ブ]

- (68) それまで一家の団欒の中で於継が加恵を顧みなかったことはないのに、この夜の於継はまるで首の自由がきかなくなってしまったように、加

恵を振返ってみることをしない。加恵は実の娘になったつもりでいた今朝までの生活が、俄かに遠のき始めているのを感じないわけにはいかなかった。それがどういう原因によるのか加恵には見当がつかない。

[華]

(65)をみると、主体であるぼくがナイフを持ったと仮定し、自ら右手を明君の胸に押しつける行動をとることが分かる。(66)も、主体である私は死んだ気分で生きていこうという決心を表わしている。つまり、主体の意図が仮定の手段として現われたために「つもりで」という形としてしか用いられないのであろう。(67)と(68)も同様な例である。

第二に、「タ形」ではなく、「名詞+の+つもりで」という決った形で現れる場合もある。この場合は、名詞が「つもりだ」の前につくために、手段として現れた主体の意図が目立ち、「仮定」の意味が分かりやすくなるが、本来の意味には何の違いもなく、主体が仮に想定した意図を行動に移すことを表す。

(69) 「走るほうはどうだ？」

「夕食後、トレーニングのつもりで構内を軽くまわることになっています」

[長]

(70) 「何とかして、……あー……クリスマスまでに、……あー……片付けたいものだ。ドイツの敗けは歴然しているじゃないか。それなのに何だって、君は兵隊に……あー……なりたいたいと考えてるの、フォレスト？」

冗談のつもりでそんなことを言った——というのは、フォレストはブルックフィールド始まって以来のチビの新入生で、泥だらけのサッカー靴を

はいても、背丈がやっと四フィートぐらいしかなかったからである。

[チ]

(71) 正社員募集、と書いてあったので自分のようにいつどこへすつとんでいってしまうかわからない者には無関係の文字だとは思っていたが、正社員のつもりで入って、適当なところで辞めてしまえばいいではないか、なにしろまだ採用がきまったわけでもないのだから、そんなことを思っているのもナンセンスだ、などといずれにしても基本的にいいかげんな気分でその会社に応募した——という訳なのである。 [新]

(72) 門のところでわれわれはふりかえり、もう一度、保津川と嵐山の若葉の景色をながめた。対岸には小滝が落ちていた。

「美しい景色は地獄だね」と又柏木が言った。

どうやら柏木のこの言い方は、私には当てずっぽうに思われた。が、私も亦、彼に倣って、その景色を地獄のつもりで眺めようと試みた。この努力は徒ではなかった。 [金]

第三に、「仮定」の「つもりだ」は、「タ形」に接続して、主体が仮に想定した意図を相手に勧誘する意味を表すという特徴がある。

(65)～(72)では、「つもりだ」主体が一人称である「仮定」の用法であったが、次の例はその主体が二人称になった場合である。「仮定」の用法が二人称に用いられると、意図を仮定の手段として想定し、その行動をとることを勧める意味になる。

(73) 四人は巢鴨まで暗い道を歩いて、木原の主唱でおでん屋へ入った。酒を飲み出すと、鮎太の心は次第に静まって、勧められるままに木原の下宿に泊ることを承諾した。

「一週間ぐらいいられるか。金は一文も持っていないぞ」

「大丈夫だ。大船に乗ったつもりでいろ」

鮎太は木原と話していたが、大沢と金子は黙って酒ばかり飲んで
いた。 [あ]

(74) 「おまえたちには親もあり、それぞれ名前もある。しかしここへ入った
からには、それを一切忘れて、人間の敵であり、特に女性の敵
でもある強姦、殺人、強盗、暴力犯を逮捕するために、新しい
名前で生まれ変わったつもりで戦わなくてはならない」 [ズ]

(75) 「さ、先生はここ。ソンキさんとならんでください。こっちがわがマッ
ちゃん。ふたりで先生をはさんで、たんのうするだけしゃべりな
さい。あとはめいめいかってにすわって。」

.....

「さ、あとは無礼講でいきましょうや。むかしの一年生になったつ
もりで、なあ、ソンキ。」 [瞳]

(76) 源氏は起きて衣を着けた。

「私が昔の恋人に逢ったように幻惑されているときは、あなたも、昔
の人になったつもりで返事して下されば、どんなにうれしいだろう
.....そんな、夢のようにはかないことをふと考えたりする。この気
分は、二人だけの秘密にしておこう。私も人に気取られぬよう
にするから、あなたも、人に知られないように心がけて下さい。あな
たのことだから、そのへんはよくわかっているだろうが」 [源]

(73)をみると、二人称である主体の鮎太に、大船に乗ったと仮定して居るよ
うに勧める表現であることが分かる。(74)も(73)と同じく、主体のおまえたちに、生
まれ変わったと仮定して戦う行動を勧める表現であると解釈できる。(75)と(76)も

同じく相手に主体の仮定を行動に移すように勧める表現である。

第四に、「仮定」の「つもりだ」は、二人称の主体を持つ疑問文に用いることができないという特徴がある。

もともと、「仮定」とは、仮定したことを自分で行為に移すか、二人称(相手)に移すように勧めるかを表す用法であるため、疑問文に用いることができないというよりは、疑問文に用いようがないといったほうが正しいだろう。その理由は、ここでの「つもりだ」は、あくまでも意図を表す手段として用いられたものであるため、外からはどういう手段を使って意図を表そうとしたか推測できないからであろう。

最後に、「仮定」の「つもりだ」は「と思う」と置き換えることができると考える。それでは次の例をみていただきたい。

(77) 「胸を悪くしてしまってますね。ずっと前から別居しているのです。極楽寺の辺に一軒借りて、ばあやを一人つけて静養させています。それで私は、一週間に一回ぐらいは行っています」

「そうですか。それはご心配ですね」

三原がそう言ったので、安田は礼 {のつもりで／と思って} 少し頭を下げるような恰好をした。[点]

(78) 「入口の手続きにあんなに時間がかかるとは知らなかったんです」と私は言った。「それにエレベーターがあんなにのろいということもね。このビルに着いたのはちゃんと約束の十分前だったんです」

〈わかっている〉という風に彼女は手短かに肯いた。……「ずいぶん長い廊下だね」と私は世間話 {のつもりで／と思って} 彼女に

声をかけてみた。彼女は歩きながら私の顔を見た。〔世〕

(79) 「私は今日、奥様にお手伝いさんとしてもう少しいてほしいとひきとめられました。でも、私にはもうつとまりそうにありません。」

「わかるよ、俺にもつとまりそうにないくらいだから。なんだか。」

冗談 {のつもりで／と思って} ご主人様は言ったが、お互い笑えず、しかもそれ以上言う気も聞く気もお互いになかったので、いつまでもまた沈黙が続いた。〔虹〕

(80) 米内光政は、海軍省から「山本長官の戦死を確認せざるを得ない」という知らせを受けた時、のちに鈴木貫太郎内閣の海軍政務次官をつとめた政友会の綾部健太郎と話をしているところであったが、

「山本の気持としては、死場所を得た {つもりで／と思って}、それで満足だったかも知れない。しかし、日本としても海軍としても、死なせたくない人物を殺した」〔本〕

(77)～(80)は、「仮定」の「つもりだ」を「と思う」に置き換えた例であって、何の違和感も感じられないことが分かる。たとえば、(77)をみると、主体である安田が礼と想定した意図で頭を下げる行動を行ったことである。(80)の場合も、「死場所を得たつもりでいる」の意味であり、主体である山本が死場所を得たと想定して意図でいることを表すものであろう。このように、「仮定」の「つもりだ」が「と思う」と置き換えられる理由は、「仮定」の基本的な意味が、「仮に想定した意図を行う」ということと、「と思う」との間に共通するところがあるからであろう。

これらの特徴をまとめると、(表8)のようになる。

(表8) 「仮定」の特徴

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">※ 仮に想定したことを行動に移す(一人称の主体)※ 仮に想定したことを相手に勧誘(二人称の主体)※ 二人称の主体を持つ疑問文に現れない |
|---|

2. 「つもりだ」と置き換えの可能なもの

すでに前節で述べたとおりに、「つもりだ」はそれぞれの用法によって置き換えられる形式も異なってくる。「予定」の場合は「予定だ」と「意志」の場合は「(よ)うと思う」と置き換えられ、「照応」の場合は「はずだ」と、「仮定」の場合は「と思う」と置き換えられる。それを表にまとめると次のようになる⁴⁾。以下では、「つもりだ」と置き換えの可能なもののなかで、「予定だ」「(よ)うと思う」「はずだ」を特にとりあげ、それぞれの比較を通して、「つもりだ」の用法の特徴をより明確にしたい。

(表9) 「つもりだ」の諸用法と置き換え

用 法	置 き 換 え
予 定	予定だ
意 志	(よ)うと思う
評 価	-
照 応	はずだ
仮 定	(と思う)

2.1 「つもりだ」と「予定だ」

従来多くの研究で、「つもりだ」の《意志》の用法は「予定だ」と置き換えられると指摘しており、特に「予定だ」については、推定というよりすでに決まっている予定や心づもりの表現だと説明している。庵ら(2000)は、「つもりだ」が話し手の個人的な心づもりを表すのに対し、「予定だ」は他人との相談

4) 「と思う」との置き換えは今後の課題としたい。

の上決めたことや公的な決定事項を表すとしながら、次の例を挙げている。

(あ) 今度の週末にクラス全員でお花見に行く*つもり／予定だ。

(庵ら(2000))

(い) 私は来年就職するつもり／予定です。(庵ら(2000))

(あ)をみると、クラス全員(他人)と決めた公式的なことを表すものであるため、「予定だ」しか使えないことが分かる。(い)をみると、私のことであって「つもりだ」が使えるのは当然なことであろうが、公式なことではないのに「予定だ」が使えるとしている。このことから、「予定だ」は個人的なことでも使えるといえよう。

本節では、「つもりだ」と「予定だ」との類似や交替可能な領域を明確にしたい。さらに、前章で述べた「つもりだ」の特徴を基にして、「予定だ」と置き換えができるということはどういうことであるか考察したい。

(81) 私たちは、どこでも仲のよい普通の家族だと思われた。一人きりで父と外出して、うす笑いや、揶揄的なあるいは気の毒そうな視線を集めることに馴れていた私は、自分の年に似合わしい役目にふたたび戻ることをよろこんだ。結婚式は、夏休みが終ってパリに帰ってから行われる予定だった。[悲]

(82) 私はまだこれから昔のポリスタレスのあった場所やその城砦であるスタヴロス村、またアノゲ山頂の聖処女修道院などを訪ねる予定だったので、レウケ村に長居はしたくなかった。しかし村人たちが、『オデュッセイア』のいくつかの個所を朗読してくれとあまりしつこく頼むの

で、私もとうとう折れざるをえなかった。〔古〕

- (83) 空は青く澄み、湖面は静かだった。この天気があと三十六時間続いてくれたらと、ゴードンは思った。彼は、翌日の夕方までには、ブリアンたちの待つ洞穴へ帰り着く予定だった。

ストップ・リバーまでの九マイルは、三時間で歩いた。〔十〕

これらの例をみると、公式な(他人との)ことである(81)も個人のことである(82)や(83)も「予定だ」が使われている。このことから、個人であれ集団であれ、すでに決定されたスケジュール的な事項は「予定だ」を用いて表すことができると思う。そのために、「予定だ」は、「つもりだ」の用法の中でも、主体の感情より個人的な決定事項の性格が強い「予定」の「つもりだ」と置き換えることができるのである。次の例をみると「予定だ」と「つもりだ」には異なる特徴があるということが分かるだろう。

- (84) 黒みがかった暗いモミのこずえのあいだから一点のしみもない紺青の空が見えた。遠くのほうで、ぎっしり並ぶ数千本の垂直の幹が厳粛な褐色の壁をなしていた。あちこちに木の間を漏れる黄色い日ざしがコケの上に暖かそうに点々と濃い光を投げていた。

ほんとうはハンスは、少なくともリュッツェラー・ホーフか、サフラン原まで大きな散歩をするつもりであった。が、いま彼はコケモモを食べながら、ものうげに意外のおもちで宙を見た。こんなに疲れたのが、われながら不思議に思われだした。

(84)の例には、「つもりだ」の「予定」が用いられている。この例をみると、主体である私の主観的な感情が感じられる。(84)の例の中で、「つもりだ」の

部分だけ切り抜いて「予定だ」に置き換えると、その違いが明らかになる。

(84)' ほんとうはハンスは、少なくともリュッツェラー・ホーフか、サフラン原まで大きな散歩をするつもりであった。

(84)" ほんとうはハンスは、少なくともリュッツェラー・ホーフか、サフラン原まで大きな散歩をする予定であった。

まず、(84')をみると、少なくともリュッツェラー・ホーフか、サフラン原まで大きな散歩という感情が強調されるのに対して、(84")は散歩をするというスケジュールを表して、より客観的なニュアンスが感じられる。このことから、同じく予定を表す「つもりだ」と「予定だ」であっても、後者のほうが客観性が強い表現であることが分かった。

ここで、交替領域において、「予定だ」と「予定」の「つもりだ」とが共存しているかを考えてみたい。

(85) 別荘に戻ってくる途中、私は松林を通して帰らないかと誘った。ちょうどかっきり十時半だった。まさに予定の時刻だった。父は私の前を歩いていていた。[悲]

(85)' *別荘に戻ってくる途中、私は松林を通して帰らないかと誘った。ちょうどかっきり十時半だった。まさにつもりの時刻だった。父は私の前を歩いていていた。

(86) 李陵は即刻この地を撤退して南へ移ることにした。それもここから東南二千里の受降城へという前日までの予定を変えて、半月前に辿って来たその同じ道を南へ取って一日も早くもとの居延塞（それとて千数

百里離れてはいるが)に入ろうとしたのである。[山]

(86) *李陵は即刻この地を撤退して南へ移ることにした。それもここから東南二千里の受降城へという前日までのつもりを変えて、半月前に辿って来たその同じ道を南へ取って一日も早くもとの居延塞(それとて千数百里離れてはいるが)に入ろうとしたのである。

これらは、「予定だ」の場合は文が成立するのに「つもりだ」を使うと非文になる例である。その理由は、両方とも名詞からできた表現ではあるが、「予定だ」は元から名詞であって、予定の性格が強いが、「つもりだ」の場合は、最初は動詞である積もるから派生した形式名詞であるため、前者より文脈によって予定の意味が強くなったり意志の意味が強くなるのだと思う。

ここから、「予定だ」は文中に用いられても、その語彙の性格が弱まらず客観的に表すことができるが、「予定」の「つもりだ」は、「予定だ」に比べて、共起するものから影響されやすいことが分かった。

2.2 「つもりだ」と「(よ)うと思う」

益岡・田窪(1989)によると、話し手の意志を相手に知らせる場合に、「動詞意志形+と思う」「動詞基本形+つもりだ」が用いられるという。またニョ- (1998)は、ほとんどの未来終止形の「しようと思っている/しよう思う」と《意志表現》を表す「つもりだ」とは置き換えられるとしている。さらに、小松(1985)は、「時間的な余裕」という観点から「つもりだ」は「(よ)うと思う」と比べ、話し手が主体としてある行為に移す直前では出現しにくいと指摘し、次のような例をあげている。

(う) (駅の構内で電車を見ながら)

A. 電車で帰ろうと思います。

B.*電車で帰るつもりです。(小松(1985))

しかし、他の条件はないのか、もしあるとすれば、両者はどのような条件で交替領域をなすのか。それについて明らかにするためには、従来の研究において指摘された「意志」の「つもりだ」と「(よ)うと思う」との類似を再検討する必要があると考える。

ニョー(1998)では、「(よ)うと思う」は「意志」の「つもりだ」とほとんどの場合置き換えることができるが、その条件として主体の意志が偶発的であるか否かが確認される必要があるとし、次の例のように偶発的な動作(動作の同時性)である場合は置き換えができないとしている。

(え) 「それをどうして早く言わないのよ!」

「言おうと思ったら、おまえが馬鹿でかい声を出すからさ」

(ニョー(1998))

(お) なんだかあまりたいした要件もない電話を、こんなふういつまでもかけているのがまずいような気になってきた。また明日、かけ直します、と言おうと思ったとたんに、

「今、どこにいるんです?」(ニョー(1998))

(か) 「あちち……」

両手で一つずつ持ち、さらにもう一つをその間に挟むようにして、危なっかしく持った。さて、行こうと思ったとき、病院の玄関から、男が二人ドタドタと入ってきた。(ニョー(1998))

確かに偶発的な動作において、「つもりだ」は用いられないのに対し、「(よ)うと思う」は用いられる。このことから、小松(1985)も「時間的な余裕」がない場合は「つもりだ」は用いられないとしたのであろう。

さらに、益岡ら(1989)は、「つもりだ」は相手の意志の有無を尋ねることができが、「(よ)うと思う」は普通(インタビューやクイズ型の質問除外)、それができないと指摘している。

(き) 今度も山田さんに投票するつもりですか／*しようと思いますか。

(益岡ら(1989))

しかし、この場合の「つもりだ」は「予定」の用法であって、意志の有無と尋ねるといっても、すでに山田さんに投票すると決めたかという、相手の決定事項がどうかのことを尋ねる表現であると思われる。このように決定事項やスケジュールに関わる意味になると「(よ)うと思う」に置き換えることができないのである。

なお、どのような条件において、「つもりだ」が「(よ)うと思う」と置き換えができるかについて考えてみたい。まず、小松らが述べているように、「時間的な余裕」がある場合は「(よ)うと思う」と置き換えることができるのは確かであろう。しかし、次のような例をみると、「時間的な余裕」があるにもかかわらず、「(よ)うと思う」と置き換えができない場合もあることが分かる。

(87) たったいま母が重病だという電報を受け取りました。四時三十分の汽車に乗るつもりです。弟のサムが向うの駅へ迎えにきてくれることになっています。 [O]

(87)' *たったいま母が重病だという電報を受け取りました。四時三十分の汽車に乗ろうと思います。弟のサムが向うの駅へ迎えにきてくれることになっています。

この例では、四時三十分の汽車という決まった時間に汽車に乗り、弟とも駅で会う約束までしておいたことから、スケジュール的な性格が強くなり、その動作が行われるかどうかの問題になるのである。つまり、「予定」の用法になるのである。そのため、主体の感情の介入ができなくなり、「(よ)うと思う」とも置き換えができなくなるのである。

(88) 「あの四人は、ここから出て行こうと考えているに違いない」
「そんなことはない」
「ウィルコックスは、ボードアンの地図を一生懸命写していた。きっとあれを持って行くつもりなんだ」 [十]

(88)' *「あの四人は、ここから出て行こうと考えているに違いない」
「そんなことはない」
「ウィルコックスは、ボードアンの地図を一生懸命写していた。きっとあれを持って行こうと思うんだ」

この例も、偶発的な行動ではないにもかかわらず、「(よ)うと思う」と置き換えができない。それは、地図を写す行為から地図を持って行くという行動が実現されると推測できるので、「予定」の用法になるからであろう。一方、「(よ)うと思う」は、三枝ら(2003)も指摘しているように、「らしい」や「だろう」のような推量の表現が接続しない限り、一人称の主体以外の場合には用いられない。

以上のことから、「(よ)うと思う」が「つもりだ」と置き換えられるためには次の三つの条件が必要だと思われる。一つ目は、「時間的な余裕」があって偶発的な動作を表すものでないこと、二つ目は、主体の感情に関わる表現であること、三つ目は、主体が一人称であることである。

また、この三つの条件は、「つもりだ」は事前計画した意図的な表現であって、その計画が意味の中心になると「予定」を表し、主体の意図という感情が中心になると「意志」を表すということを裏付ける根拠となるとも考えられる。

2.3 「つもりだ」と「はずだ」

寺村(1984)は、「はず」について、ある事柄の真偽についての判断が求められたとき、あるいは自ら判断を下すべき場面に直面したとき、または断言的にはいえないが、「自分が現在知っている事実(P i , ii …)から推論すると当然こう(Q)なる」、ということを表すときに用いられると述べている。このことから、「はず」は、ある根拠から推論すると当然こうであるということを表す用法だと考えられる。

(く) 「親方は今日来られますか？」

P i) 親方は月曜日以外は毎日来る

今日は月曜日でない

ii) 親方は特別の事情で来れないときは、いつも午前中に電話してくる

今日は午後2時である

Q 「はい、来るはずですよ」(寺村(1984))

このことから、「はずだった」になると、出現することが当然であると思われた

ことが出現しなかったの意味になることが推測できよう。

さらに、奥田(1993)は、「はずだ」が、「したはずだ」「していたはずだ」のような接続形式を持つ場合について説明し、話者の思い込みを表現していると述べた。また、「はずだった」になると、動詞のし手はそのつもりになっていたという意味になり、現実と話し手の判断との間にズレが生じたことを表す場合もあることを示唆した。この、「ズレ」は、「つもりだ」が「照応」の意味を持つ場合に見られる現象と同じである。このことから、本来、「はずだ」と「照応」の「つもりだ」とは異なる次元のモダリティ性を持っているにもかかわらず、置き換えが可能になるわけが推測できよう。

ここで、「はずだ」と「照応」の「つもりだ」とは、話し手(主体)の判断(意図)と現実の間にズレが生じた場合には置き換えが可能になることが分かった。そこで、次の例のように置き換えられたとき、両用法にはどのような意味の違いが生じるのかについて考えてみたい。

(89) 大股ですたこら走ったもんだ。だが問題は、どんなに足が早かろうと、また事実自分でいうのもおかしなもんだが、かなりうまくやったつもりだったのだが、あのパン屋の一件のあと、とうとう警察にパクられてしまったことだ。 [長]

(89)' 大股ですたこら走ったもんだ。だが問題は、どんなに足が早かろうと、また事実自分でいうのもおかしなもんだが、かなりうまくやったはずだったのだが、あのパン屋の一件のあと、とうとう警察にパクられてしまったことだ。

(90) 旧悪のたたりだ。かくされた醜行のむくいだ。天罰というものは、あ

やまちをけろりと忘れてしまって、身びいきから、それを許したつもりでも、何年もたってから、のっしのっしと、やって来るのだ。 [ジ]

(90)' 旧悪のたたりだ。かくされた醜行のむくいだ。天罰というものは、あやまちをけろりと忘れてしまって、身びいきから、それを許したはずでも、何年もたってから、のっしのっしと、やって来るのだ。

この例をみても分かるように、「つもりだ」を「はずだ」に置き換えても何の違和感もないが、その意味には違いが感じられる。(89)では、主体がうまくやったと主観的な判断を下したことが、実際には違う結果になったことを表し、(89')では、主体がいつもと比べたことを根拠に推論してうまくやったと下した結論が、実際には警察にパクられるという予想外の結果になったことを表している。このことから、「つもりだ」はあくまでも個人の判断に反した結果が出た表現であって極めて主観的な判断になるのに対して、「はずだ」は何かの根拠から出した推論に反した結果の表現であって客観性を持った判断であることが分かる。

IV. 結 論

「つもりだ」についての従来の研究では、主に、意志動詞と接続するか無意志動詞と接続するかによる考察や、意志の持続性、確固性などによる考察が主流であった。また、《意志》の用法についての議論が多く、他の用法との関連について論じる場合、その統一性がはっきりみえてこない印象を受ける。そこで、本論文では、二人称との共起関係、類似表現との交替現象、そして話し手の意図性の強弱という観点から、「つもりだ」を「予定」「意志」「評価」「照応」「仮定」の五つに分類して考察した。その結果をまとめると、以下のようなになる。

(表9) 「つもりだ」の諸用法の特徴

	接続形式		実現	共起		意味論的特徴	置き換え				
	ル	タ		二人称			予定だ	(よ)うと思う	はずだ	と思う	
予 定	○	・	未実現	○	明日は 五月に	客観的 ↑ ↓ 主観的	=	・	・	・	
意 志	○	・	未実現	△ 失礼	絶対に 徹底的な		意図的	・	=	・	・
評 価	○	・	実現中	(X) 失礼	すこしは ずっと		意図的	・	・	・	・
照 応	・	○	反対実現	△ 失礼	わざと		意図的	・	・	≡	・
仮 定	・	○	仮想実現	X	(かりに)		意図的	・	・	・	≡

① 「予定」と「意志」は、形態的な区別がないため、今までの研究ではいずれも≪意志≫として捉えられてきた。しかし、次のように、異なる特徴を持っていることが分かった。

a. 「予定」は、主体の感情より決定事項(スケジュール)に関わる表現であるため、主体が二人称である疑問文にも現れる。また、「(よ)うと思う」とは置き換えられず、「明日は」「五月に」のような具体的な時を表すものと共起する。

b. 「意志」は、主体の感情を表す用法であるため、主体が二人称である疑問文に用いられると失礼な表現になってしまう制約がある。また、「予定だ」と置き換えられず、「絶対に」「てやる」のような感情が強調された表現と共起する。

このように、「予定」と「意志」とは、その特徴に差異があることから、それぞれ異なる用法だと考えられる。

② 「評価」と「照応」そして「仮定」は、主体の主観的な意図を表すという意味的な共通点があるため、主に同じ用法として捉えられてきた。しかし、次のように、異なる特徴を持っていることが分かった。

a. 「評価」は、現在のことを主体の主観で評価したものであるため、「ル形」に接続する。

b. 「照応」は、事態の成立の前、主体の持っていた元の意図を表すものであるために、「タ形」に接続する。また、「照応」は、現実と自分の意図との間にズレが生じるという特徴から、「はずだ」と重なる部分があり、置き換えも可能になる。

c. 「仮定」は、主体が仮に想定したという意図を持って、行動に移すことを表すものであるために、「タ形+つもりで」「名詞+の+つもりで」という決まった形で現れる。また、「仮定」は、仮に

想定するという意味から、「と思う」と重なる部分があり、置き換えも可能になる。

このように、「評価」と「照応」と「仮定」は、その特徴に差異があることから、それぞれ異なる用法だと考えられる。

以上、「つもりだ」を「予定」「意志」「評価」「照応」「仮定」の五つに分類し、その全体像を描き出すことを試みた。しかし、より明確な結論を出すためには、まず、小説だけではなく多方面の資料から例文を抽出し分析する必要があると思う。また、「つもりだ」と「予定だ」「(よ)うと思う」「はずだ」などとの交換領域については、さらなる検討が必要だと考える。また、多くの研究で、「つもりだ」と置き換えられるとしているのにも関わらず、まだ体系的な分析が行われていない「気だ」との比較を含め、残された問題点は今後の課題にしていきたい。

【参考文献】

- 金田一春彦(1953)「不変化助動詞の本質」『国語国文』22-3
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 水谷信子(1985)『話しことばの文法』くろしお出版
- 小松紀子(1985)「意向表現の現れ方—ツモリ・タイ・ウ／ヨウを中心にして—」『米加十一大学日本研究センター』
- 名柄・広田・中西(1987)『形式名詞「外国人のための日本語例文・問題シリーズ2」』荒竹出版
- 森山卓郎(1988)『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- (1990)「意思のモダリティについて」『坂大日本語研究2』大阪大学
- 益岡・田窪(1989)『基礎日本語文法』くろしお出版
- 仁田義雄(1991)「意志の表現と聞き手存在」『国語学165』
- 西原鈴子(1991)「第2部 副詞の意味機能」『副詞の意味と用法』国立国語研究所
- 益岡隆志(1992)「表現の主観性と視点」『日本語学11-8』
- 山岡政紀(1992)「意志表現の文型提示に関する一考察」『日本語教育77号』
- 山田あき子(1993)「自然な言語運用—『……つもりですか』を巡って—」『日本語学12』
- 原田・小谷(1996)「言い訳と失意の表現構造—～つもりだった、～はずだった、～べきだったの場合—」『甲南大学紀要文学編』甲南大学
- ニョー・ゲイ・フン(1998)「『つもりだ』について—『しようと思う』と『はずだ』との違いに関する一考察」『日本研究教育年報』3月号 東京外語大

- 安達太郎(1999)「意志のモダリティと周辺形式」『広島女子大國文16』9月号
- 吉川武時(2000)「『つもり』について」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』東京外国語大学
- 酒井順子(2000)「『その(そんな・どういう)つもり』の談話機能」『東京外国語大学 留学生日本語教育センター論集』東京外国語大学
- 庵・高梨・中西・山田(2000)「§14.話し手の気持ちを表す表現(2)—意志・願望—」『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- (2003)「§19.話し手の気持を表す表現(3)—意志—」『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 杉村泰(2001)「現代日本語に置ける文末表現の主観性—ヨウダ、ソウダ、ベキダ、ツモリダ、カモンレナイ、ニチガイナイを対象に—」『世界の日本語教育』6月号
- 迫田久美子(2002)「はず・つもり」『月刊日本語ジャーナル』8月号 다락원
- 三枝・中西(2003)『日本語文法演習 モダリティ・終助詞』スリーエーネットワーク
- 市川保子(2005)『初級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク
- 이아람(2005)『「つもりだ」について』『韓国日本語学会学術発表会論文集12』韓国日本語学会
- 김은희・이경수訳(2005)『기본일본어교육사전』시사일본어사

ABSTRACT

The consideration of [Tsumori-da(つもりだ)]

Aram Lee

Department of Japanese

Language and Literature

Graduate School of

Sungshin Women's University

The studies about [Tsumori-da(つもりだ)] have been mainly focused on the relation with volitional verb and non-volitional verb and considerations of the continuance and the firmness of volition. Although there have been many discussions about the relationship between volition and [Tsumori-da(つもりだ)], there is no agreement in those discussions. In this study, [Tsumori-da(つもりだ)] is classified in expectation(予定), volition(意志), evaluation(評価), correspondence(照応) and assumption(仮定) by considering of co-occur relation between [Tsumori-da(つもりだ)] and the second person, an alternation in similar expressions and [Tsumori-da(つもりだ)] and a degree of volition in [Tsumori-da(つもりだ)]. In brief, the result of the study is as follows.

In previous studies about [Tsumori-da(つもりだ)], it is said that expectation (予定) and volition(意志) of it are the same as volition(意志) because there is no distinction between them.

However, when [Tsumori-da(つもりだ)] is used as the expression of expectation (予定), it cannot be replaced with [Youto-omou((よ)うと思う)] but can be used in an interrogative sentence which has the second person as a subject because it is an expression of schedule rather than volition. And when [Tsumori-da(つもりだ)] is used for the expression as volition(意志), it cannot be replaced with [Yotei-da(予定だ)] and can be rude expression in an interrogative sentence which has the second person as a subject because it is the expression of intention. For these reasons, it is thought that both are not the same because there are different features between expectation (予定) and volition(意志) in [Tsumori-da(つもりだ)].

It is considered that these have been treated same because evaluation(評価), correspondence(照応) and assumption(仮定) in [Tsumori-da(つもりだ)] have a common meaning in that these express subject's intention. But, it can be found in this study that these have different features respectively.

It is used just behind of "ル形" when [Tsumori-da(つもりだ)] is used for the expression of evaluation(評価) because it is the expression of evaluation of "current event" with a subject's subjectivity. In the case of correspondence(照応), [Tsumoro-da(つもりだ)] can be replaced with [Hazu-da(はずだ)] because it means the intention that a subject had it before realizing a certain event. As for the assumption(仮定), [Tsumori-da(つもりだ)] can be replaces with [To-omou(と思う)] because it has a similar

meaning with [To-omou(と思う)]. For these reasons, it is considered that these three are different.

To classify [Tsumori-da(つもりだ)] into expectation (予定), volition(意志), evaluation(評価), correspondence(照応) and assumption(仮定), it is demanded to analysis of sentences from not only novels but also various kinds of materials. Also, further study is needed to find the reason why [Tsumori-da(つもりだ)] can be replaced with [Yotei-da(予定だ)], [Youto-omou((よ)うと思う)] and [Hazu-da(はずだ)], and to analysis of the substitution with [Ki-da(氣だ)] which is already proved that it can be replaced with [Tsumori-da(つもりだ)] in many theses.